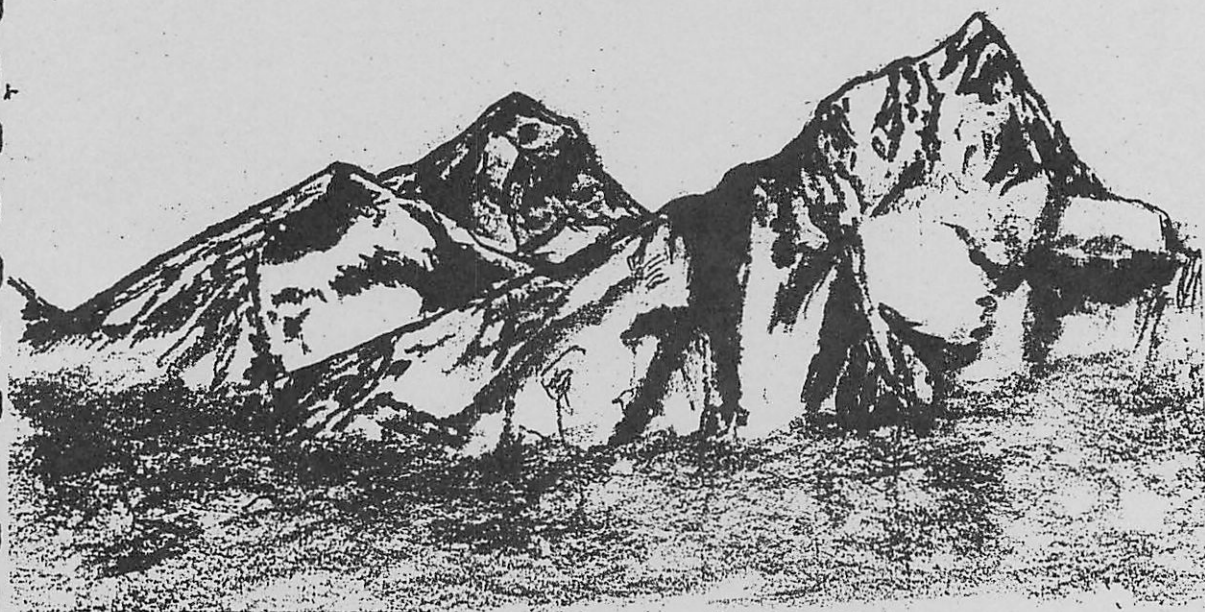


北関東の山無し県

茨城のクライマー集団の会報

R&V 22号

1996年7月～9月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

R o c k a n d V a l l e y 96 夏 No22



夏合宿：涸沢にて全員集合！

《photo by motozu》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

今年の山は残雪の多い年であった。一ノ倉沢は8月になっても旧道出合まで雪があった。黒部の関電歩道は9月になっても通行できなかった。特に上越国境は、今までにこんな多い年は初めての経験であった。雪渓崩壊による事故も数件起きた。だから豪雪地帯の沢登りは敬遠した。年一回はゴルジュの谷にアタックしようとの計画も今年を取りやめた。沢登りには行くことは行ったが、沢登りとも岩登りとも言えないスラブ登りが数本だけだった。当然沢登りに関しては欲求不満が残った。友好団体の月報を見ていると、このような年でも行く所(クラブ)は行っているのである。他のパーティが雪渓が悪くて引き返した所でも行っているのである。所詮自分とは比べ物にならない位、場数を踏んでいる先生方であるから、雪渓をよむ目が違うのは承知している。自分も一本位は行ってみても良かったかなと後悔している点も正直ある。

自分は臆病な人間である。自分は雪渓が怖い。雪渓のどこが怖いといえば崩壊が怖い。危機一髪で崩壊に巻き込まれず済んだこともあるし、まだまだしっかりしてると思われる雪渓の内部が、層

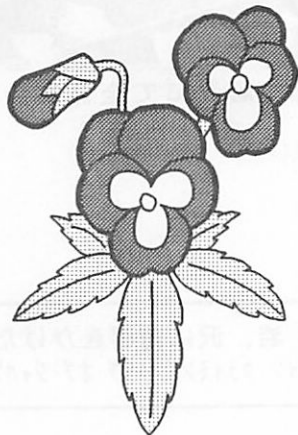
の部分から剥離した所(跡)を何回も見ることがある。今にも崩れそうなSBや、出口の見えない大きな雪渓以外は下を潜ることが多い。下を潜れば10秒、巻けば数時間の世界は珍しくない。えらい苦勞をして高巻いてやりすごした雪渓が、そのまま残っているのをみると、あ〜あそのまま行けばよかったっけ、と思うことが殆どなのだ。だから雪渓の上や下を行きたくなるのは当然なのだが。

断っておくが、これから述べることはあくまでも仮定である。1年間の内で、ある沢のその部分が崩壊するのは一度だけとは限らない。少しずつ崩壊を繰り返す。平均10回と仮定しよう。1部位1回の崩壊危険期間を3日間と仮定して、10を乗ずれば30日になる。つまり雪渓の不安定期間は約1カ月と言えようか。それを秒の単位に直すと2592000秒になる。雪渓の危険地帯を通過する時間を単純に平均60秒と仮定する。1カ月に10回の崩壊があるから、ある部位で崩壊に直面する確率は $60 \times 10 / 2592000$ になる。つまり $1/4320$ の確率で雪渓の崩壊に会うことになる。さらに一回の山行で10カ所の危険雪渓に会うと仮定すると、 $10/4320$ つまり $1/432$ の確率になる。つまり危険雪渓を回

避しないでいると432回の山行で事故に会うことになってしまう。さらに10人パーティだったら43回に一回の確率で誰かが犠牲になる。だから私は恐いのだ。

沢屋さんのように雪渓をよむ力のない我々は、危険と感じたら巻くことを考えよ。雪渓をよめるようになるには一にも二にも経験が必要である。無駄な高巻きを繰り返すことによってよめるようになるのだ。しかし、どんなベテランでも地震予知と同じで、まもなく崩壊することはわかっても、何時間後に崩壊するかはわからない。だから巻くのである。一言、付け加えておくが、高巻きは安全とは限らない。高巻きでえらい苦勞をした経験は誰もが持っているだろう。それを加味して巻く事を考えるのは言うまでもない。

わかっていただけたかな諸君。なにに、計算の仕方が変だと。どこが変なんだい。理路整然としてるじゃないか。なんか疑問があったらT大学のF教授に聞いてみな。これは正しい計算だと言うに違いないから。



(本図一統)

《目次》

1996年 夏号7月～9月 ACC-J 茨城

巻頭言	・・・ 1
集会報告	・・・ 3
山行報告	・・・ 4
奥秩父・丹波川本流～ノ瀬川本流	・・・ 5
谷川岳一の倉沢衝立岩正面壁雲稜第2ルート	・・・ 7
富士山	・・・ 8
谷川岳一の倉沢南稜	・・・ 9
谷川岳一の倉沢中央稜	・・・ 9
谷川岳天神尾根	・・・ 10
谷川岳一の倉沢烏帽子沢奥壁中央カンテ	・・・ 10
谷川岳一の倉沢烏帽子沢奥壁凹状岩壁	・・・ 11
白毛門ゼニイレ沢	・・・ 12
谷川北面檜又谷小スラブ	・・・ 13
谷川岳一の倉沢衝立岩正面壁雲稜第一ルート	・・・ 14
＝アイガー（敗退）＝《ヨーロッパアルプス》	・・・ 16
＝メンヒ南東稜＝	・・・ 17
＝ユングフラウ＝	・・・ 17
谷川北面仙ノ倉沢中ゼン	・・・ 18
阿武隈川白水沢左俣	・・・ 20
前穂東壁右岩稜古川ルート	・・・ 21
前穂北尾根四峰正面壁松高ルート	・・・ 22
北穂東稜	・・・ 23
北穂高滝谷クラック尾根	・・・ 24
前穂高北尾根	・・・ 25
北アルプス屏風岩東壁鷲翔ルート	・・・ 27
甲斐駒ヶ岳・尾白川黄蓮谷右俣	・・・ 29
皇海山	・・・ 31
剣沢彷徨	・・・ 31
剣岳源治郎尾根Ⅰ峰中谷ルート	・・・ 32
湯檜曾川本谷	・・・ 33
大倉沢	・・・ 33
白毛門沢	・・・ 34
友好団体の月報・会報・その他紹介	・・・ 35
編集後記	・・・ 37

表紙絵…カラパタールから望む、エベレストとヌブチェ by… I, Nama i

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 7 月 】-----

7 月 3 日

出席者 本図、木村、古山、新美、今村、紺野、高木、鯉河、告、笹平、今井、
菊地、沢田

7 月 17 日

出席者 本図、高木、今村、笹沢、木村、坂本（昭）、古山

7 月 31 日

出席者 古山、本図、今村、紺野、木村、笹平、告、澤田、鯉河、菊地、高木

-----【 8 月 】-----

8 月 7 日

出席者 本図、古山、菊池、今村、告、新美、澤田、笹平、紺野

8 月 21 日

出席者 本図、古山、木村、高木、坂本（昭）、今井、笹平、告、新美、菊地、澤田

-----【 9 月 】-----

9 月 4 日

出席者 本図、古山、新美、今村、沢田、笹平、紺野、菊地、告、今井、坂本（恵）

9 月 18 日

出席者 本図、古山、新美、紺野、告、坂本（昭）、高木、菊地、笹平

山行報告

《 1996年 7月～9月 》

-----【 7月 】-----

7月	7日	岩トレ・三ツ峠	L古山、本図、木村、菊地、新美、紺野
7月	14日	丹波川本流～一ノ瀬川本谷	L本図、高木、笹沢、紺野、沢田
7月	14日	谷川岳一ノ倉沢衝立岩正面壁雲稜第二	L古山、告
7月	18日	富士山	L今井、大崎、他1名
7月	20日	《会山行・谷川岳》	
		一ノ倉沢南稜	L紺野、新美
		一ノ倉沢中央カンテ	L古山、笹沢
		一ノ倉沢中央稜	L坂本（昭）、沢田
		天神尾根	高木
7月	21日	一ノ倉沢中央カンテ	L坂本（昭）、告、紺野、新美
		一ノ倉沢凹状岩壁	L笹平、生井、古山
		白毛門ゼニイレ沢	L本図、今村
7月	28日	谷川岳北面檜又谷小スラブ	L本図、新美、大崎
7月	28日	谷川岳一ノ倉沢衝立岩正面壁雲稜第一	L古山、中居、

-----【 8月 】-----

7月24日～8月9日	ヨーロッパアルプス	今井、他	
8月	4日	谷川岳中ゼン	L古山、本図、笹沢
8月	11日	阿武隈川白水沢左俣	L本図、大崎
8月10～17日	《夏合宿》		
	11日	前穂東壁右岩稜古川ルート～Aフェース	L古山、新美
	12日	前穂北尾根四峰正面壁松高ルート	L古山、新美
	13日	前穂北尾根四峰正面壁松高ルート	L高田、中居
	14日	北穂東稜⇄北穂～奥穂	L本図、高木
		クラック尾根	L古山、高田、生井、告、新美、笹平、 中居、澤田、紺野
	15日	停滞	
	16日	前穂北尾根	L笹平、紺野、
		屏風岩（鷲翔ルート）	L古山、高田、中居
8月31～9月1日	黄蓮谷右俣	L古山、沢田、新美	
8月31～9月2日	白馬岳・白馬鎚ヶ岳	笹沢、他2名	

-----【 9月 】-----

9月	8日	皇海山	古山
9月13~17日	剣沢大滝	L高桑、本図	
9月14~16日	剣岳・源治郎尾根I峰下部中谷ルート	L古山、笹平	
	本峰南壁A1	L古山、笹平	
9月	23日	岩トレ 御岩山	L古山、本図、高木
9月28~29日	《会山行・白毛門集中》		
	・湯檜曾川本谷	L古山、今井	
	・大倉川	L坂本（昭）、新美、紺野	
	・白毛門沢	L本図、沢田、今村	

奥秩父 丹波川本流～一ノ瀬川本流

1996. 7. 14

パーティ L 本図一統、笹沢ひろみ、澤田仁、紺野哲雄、高木博行

ACC-J 茨城に入会後、初の山行となった沢登りは、一ノ瀬川本流だけの予定が丹波川本流からの廻行に変更となり、本図さんから渡された資料によると行動時間が約8時間、泳ぐ箇所がたびたびあるらしい。

昨年からの禁煙により大幅増となった体重など、不安を抱きながら下妻を前夜9時に出発し、14日午前1時に三条新橋の河原付近に到着、小宴会後、シュラフにもぐり込んだ。朝、目を覚ますと絶好の廻行日和、足取りも軽く？河原を進むと最初の難関、幅2m、長さ40mの手取淵が、現れたが難しいところは、本図さんがハーケンを打ち、カラビナを付けてくれ、それをホールドに何とか落ちずに通過。次に現れたのは胴木滝、巨大な釜、豊富な水量、当然巻くものと思っていると、本図さんがザイルを引いて釜をひと泳ぎ、瀑芯の左に取り付き難く登ったが、高木はなかなか登れず、やっとの思いでずり上がる。紅一点、笹沢さんは難なくはい上がる、これには驚いた。丸山入道淵は、ザックピストンで突破する。

所々、粗大ゴミのようなものが落ちていたが、道路標識が河原に立てかけてあったのには驚いた。道路標識をバックに記念撮影。昼食後、一ノ瀬川

へ入渓、再びゴルジュが連続するが澤田さんと紺野さんの果敢な泳ぎで難なく突破、やがて遭難碑の所へ到着。廻行を終了する。

紺野さんが竿を出し、餌釣りで岩魚を狙うが岩魚はお留守のようだ。右岸に鮮明な踏み跡があり、入渓者の多さを物語っている。右岸の踏み跡をたどるとやがて一ノ瀬林道に導かれアスファルトの上をヒタヒタと下り帰路についた。

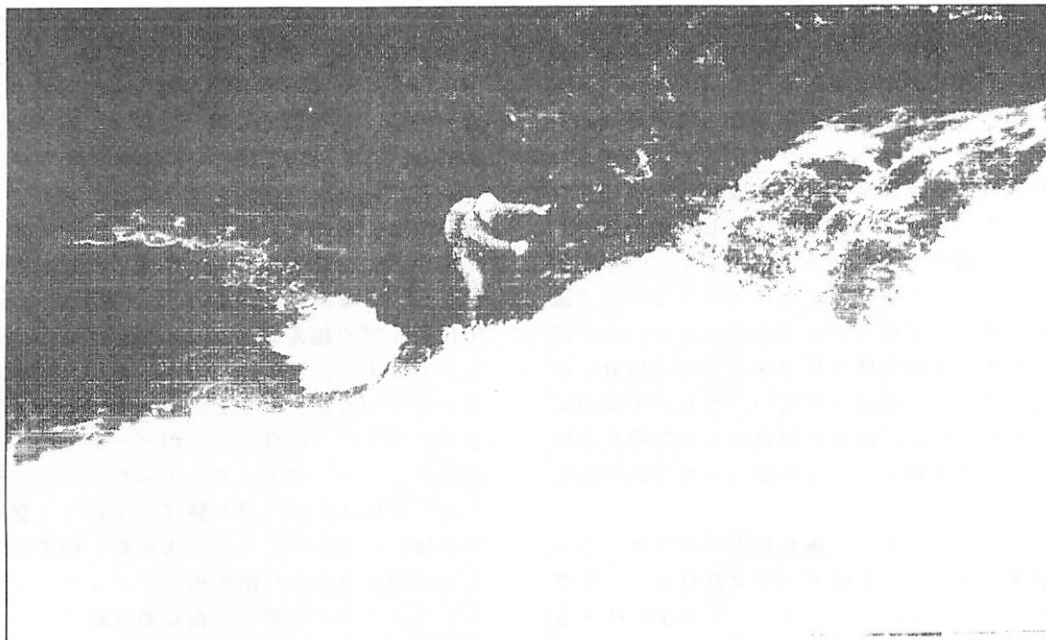
今回の廻行で気になった事が一つゴミの多さ！林道から谷にゴミを投げ捨てる人があるのか、とても残念に思った。

三条新橋発(7:43)ー昼食(11:58～12:41)ー一ノ瀬川出合(12:52)ー遭難碑の所(14:34～14:57)ー一ノ瀬林道(15:14)ー三条新橋着(16:24)

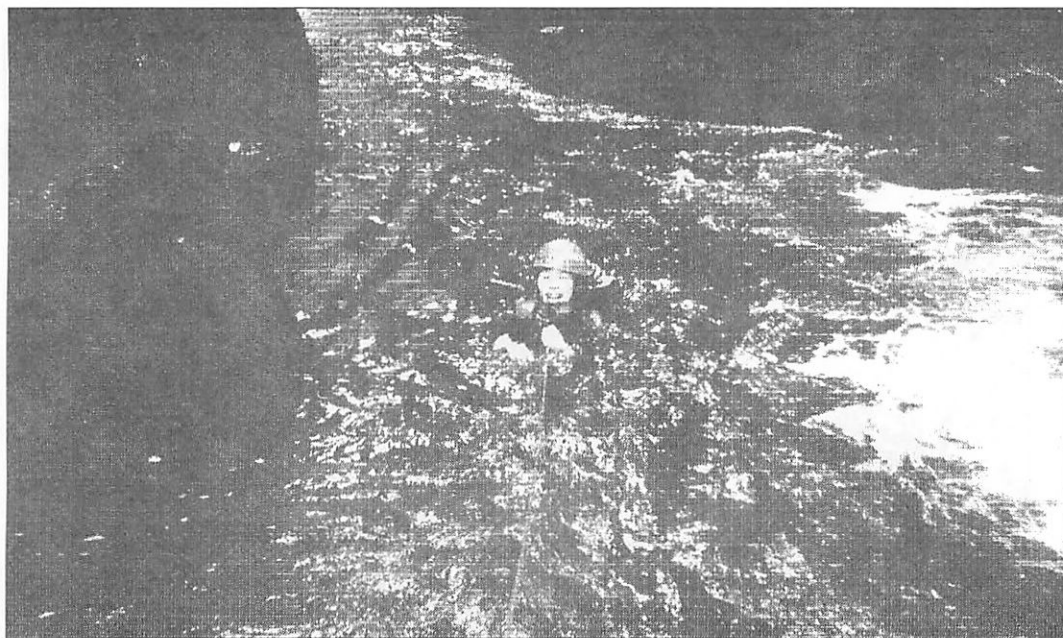
(高木 記)



手取淵を通過する



胴木滝を登る。



一ノ瀬本流を泳ぐ。

谷川岳一の倉沢衝立岩正面壁雲稜第2ルート

1996. 7. 14

パーティ L古山正文、告 広道

まだ、早いかな？ やめとくか、何て考えているうちに当日になってしまった。

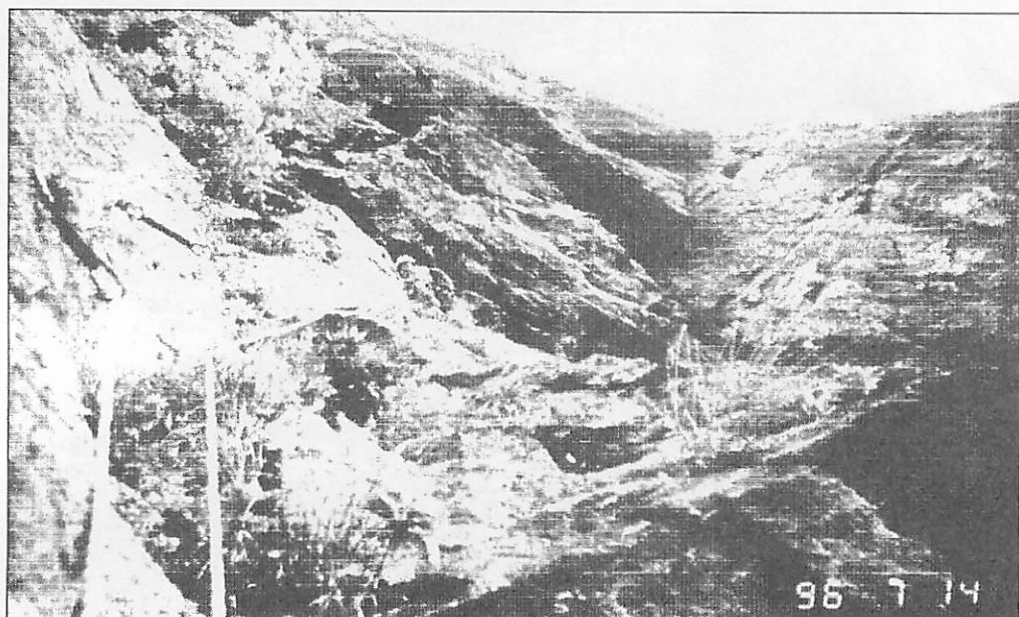
結局、いつものようになんとかなるさと登り始める。二人用テラスからトップで登っていくが、早くもあぶみの最上段に乗っても支点に手が届かない。どうやらあぶみの調整に失敗したようだ。しかたなく予備のテープあぶみを出す、一本しかないのだからいちいち乗り換えなきゃならないので誠に効率が悪い。雲稜第2は支点の効きがいいと聞いていたが、金属を使う仕事をしている自分にはとてもサビていて信用できない。それこそ支点に体重をかけるたびに清水の舞台から飛び降りる気分だ。ミヤマ直登ルートと合流した所で古山氏をビレイ。

次のピッチはいよいよ核心の大ハングだ。古山氏が豪快に登っている所でミヤマ直登ルートに登ってきたパーティにビレイポイントを少しゆずる。おたがいビレイしながら早く家に帰ってビールを飲みたいとか世間話をしているうちに古山氏から『登っていいよ。』の声がする。大ハングは厳密には3つの階段状に別れている。最初の二つは問題ないが最後のやつが完全に体が宙に浮いてしまう。思わず下を見ると吐きたくするような高度感だ。核心部が終わりあとはすんなりと思ってい

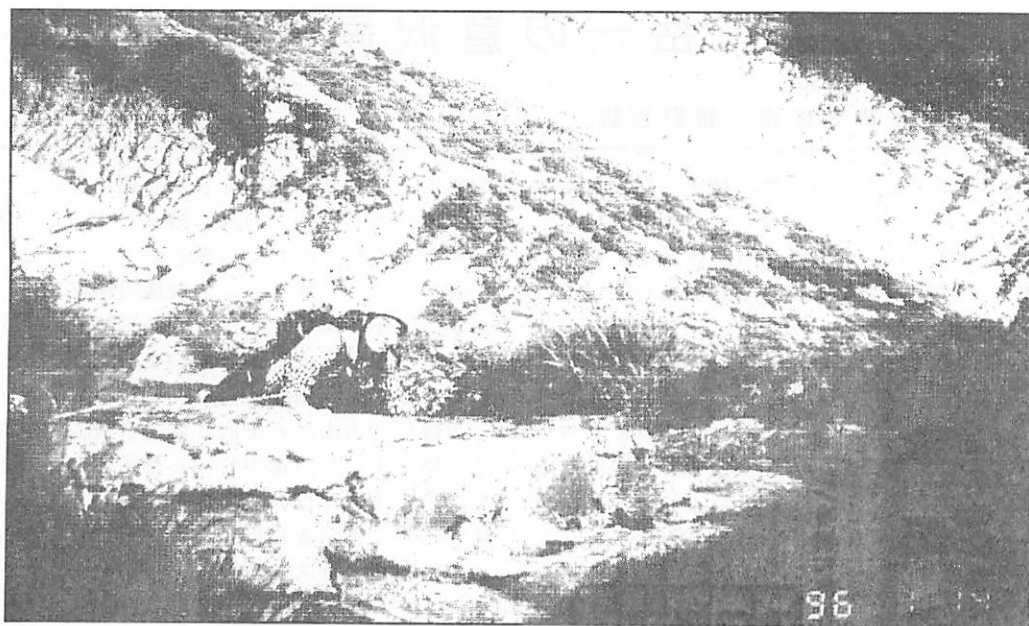
たが次のピッチがけっこういやらしい。人工とフリーのミックスなのだが、あぶみから降りる気になれない。どうしても進めないでハーケンを一本打つ。ある意味ではここが核心なのかもしれない。带状ハング直下で古山氏をビレイ。ここで昼食にする。すぐ左にはミヤマ直登ルートのパーティもいる。ここで抜かれてしまうが自分たちはあと2ピッチなのでゆっくりする。带状ハングを古山氏トップで越えるが、ここでザイルが伸びなくなってしまう。どうしたのかと思いつつタバコをふかしていると、やっと『登っていいよ。』の声。どうやらミヤマ直登ルートのパーティがルートを間違えてこちらに入ってしまったらしい。前のパーティが抜けてから登り終了。1ピッチ懸垂下降で北稜にでるが、こちらは大渋滞。順番待ちをしている間に雷がなり始め雨でビショビショになってしまう。ミジメな姿で出合に着き終了。

出合(4:25)ー取り付け(6:00)ー大ハング上(10:20)
ー带状ハング直下(12:00)ー終了(14:20)ー出合
(17:10)

(告 記)



雲稜第2…大ハング下の登攀



雲後第2…最終ピッチにて古山

富士山

1996. 7. 18

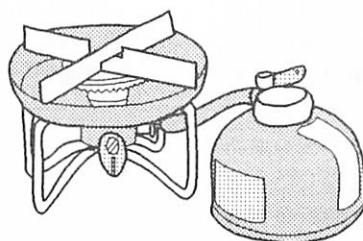
パーティ L 今井 弘、大崎真奈美、他1名

6月26日と6月27日に富士山を登ったが、高度順応がされているのか心配なのでまた登ることにした。17日午後10時に家を出た。18日午前3時頃到着予定が首都高速が渋滞していた為4時半頃になってしまった。身支度をして午前5時に五合目を出た。山開き前は静かな富士山も今日の富士山は天気も良かったせいか賑やかな山になっていた。福島から来たという60才前後のおばさん、外人の団体さん、犬の散歩のついでに登ってきたようなおにいさん等が富士登山を楽しむ

んでいた。富士山頂はのんびり歩いたせいか14時になった。降りてから風呂でも入ろうと思っていたのだが、五合目に着いたときには日も落ちてしまった。風呂も入らず家に帰ることにした。

6月に登ったときよりも高度順応がされたせいか楽に登れた。来週のヨーロッパのことを考えると期待と不安で一杯だ。

(今井 記)



谷川岳一の倉沢南稜

1996. 7. 20

パーティ L 新美達也、紺野哲雄

7月20日朝、起きてみて外の様子を見てみるとあまりいい天気ではありませんでした。今日は新美さんと南稜に登ることになっています。身支度を整えて、出発しますとたくさんの人が朝早くから岩場へと向かって、つかつかと早足に雪渓の上を歩いていました。これが一の倉沢の朝なんだなと思い、自分も期待と不安を胸に抱え、みんなと一緒につかつかと歩きました。ヘロヘロになって南稜テラスにつきますと、順番待ちでその間に何回もガイドブックでルート図を見ていました。そして順番がきて、1ピッチ目新美さんがトップで行き、2ピッチ目今度は自分がトップで登る番です。初めての事なので慎重に行こうと思いました。それから草付きの部分をザイルをかかえてトコトコと回り込む感じで次のピッチに向かいます。3、4ピッチ目はリッジ状が多くて視界が広く足がすくむ感じでした。この辺りで、自分はATC

を落としてしまったのですが、途中で止まり、下降しているパーティの人に拾ってもらい、無事戻ってきました。そして最後のピッチ、ここは傾斜が強いフェース状でした。最後の所にシュリングがぶら下がっていました、ここで終わりということもありどうしようかと思いましたが、それほど迷わずそれを利用して登り、終了しました。

下降は、古山さん笹沢さんと合流して6ルンゼを下降しました。途中ザイルが抜けなくなってしまい、古山さん笹沢さんに登り返してもらうことになってしまいました。それからまた下降を再開して、南稜テラスに着いて、下山しました。

(紺野 記)

谷川岳一ノ倉沢中央稜

1996. 7. 20

パーティ L 坂本昭裕、澤田仁

今年の谷川は本当に雪が多い、7月後半になっても一の倉沢出合までたっぷり雪がある。中央稜の下降ルートの衝立前沢の上部にも残っている。先日略奪点付近でブロック雪崩で命を落とされた方がいる。そんな事もあって下降ルートの方が気になっていた。中央稜の登攀自体は、さほど心配ではなかった。あえて心配するとすれば、二人の体力だけであった。案の定テールリッジを歩いているだけで息切れしてしまった。先が思いやられる。

中央稜は順番待ちが大変だった。小一時間ぐらいは待たされた。やはり手頃なルートなのかなあ。まず、坂本がトップを引いた。久々だがなんか調子良さそうである。しかし、ワンピッチ毎に「待ち」である。いやはやこの待ちには閉口させられた。仕様がなくて、隣のルート（中央カンテ）に行く古山さんと笹沢さんを探したり、そのまた向こうのルート（南稜）に行く二人を探した。どのルートも人が多くにぎやかである。時折笹沢女史を応援して茶化したが、反応はなかった。核心を越すまでの数ピッチは坂本がトップを引いたが、

途中からつるべにした。後半は二人ともちょっとばて気味だった。まあ、お互いトレーニング不足を露呈した。とはいえ12過ぎには登攀を終了していた。予想通り下降ルートも「待ち」であった。北稜の懸垂点は、かなりしっかりしていた。カナビラが残置されており、ゲートも開かないようになっていた。略奪点は思ったほど雪渓は大きくなかった。この時には、悲惨な事故があった面影など微塵もない。そっと置いてある花だけがその事を示していた。少し疲れたが、最後まで気を抜かないように帰り道を歩いた。一の倉沢出合のテント場には4時過ぎに着いた。

出発(6:00)ー登攀開始(8:30)ー登攀終了(12:15)

ー下降開始(13:00)ー一の倉沢出合(16:00)

(坂本 記)

谷川岳・天神尾根

1996. 7. 20

パーティ L 高木博行

岩登りの人たちと違いハイキング気分でやってきた初めての谷川岳、前夜は一の倉沢出合に泊まり朝を迎えた。一の倉沢の岩壁と言えは余りに有名なので、頭の中で想像していたより正直なところ小さく感じた。出発の準備中、なんと車にキーを閉じ込めてしまい、新美さんにJAFのカードを借り、JAFに来てもらうが、本人か本人の免許証が無ければ通常料金になるそうで、仕方なく払うが新美さんから借りたカードを盗難カードのように疑われ、腹が立ったがこちらはお願ひする立場、我慢する。こうしている間にも時間は過ぎ、巖剛新道から予定を変更、ロープウェイで天神平まで行き、天神尾根から頂上を目指す事にした。

天神平からしばらく木道が続き尾根に出るがガスで何も見えず、見えるのは中高年登山隊のみ、頂上でも中高年パワーに押され、居心地が悪くすぐ下り始める。昼過ぎには一の倉出合に戻り、皆が帰るまで岩壁を幾度となく見上げて過ごしたので、足のほうより首のほうが疲れてしまった。次々とクライマーが満ち足りた顔で出合に戻ってくるのを見てみると、次に来るときは自分もあの壁を登りたいと強く思った。

天神平(9:30)ートマノ耳(11:50)ー天神平(13:30)

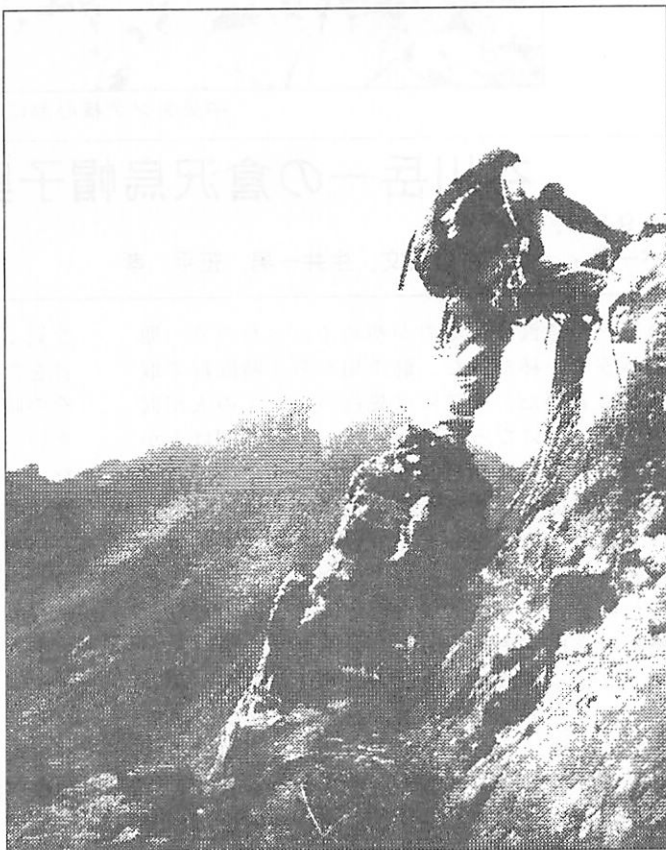
(高木 記)

谷川岳一の倉沢烏帽子奥壁中央カンテ

1996. 7. 21

パーティ L 坂本昭裕、告広道、紺野哲雄、新美達也

谷川岳プレ合宿二日目は台風の接近で雨の予報であったのに反して、当日は朝から快晴であった(南関東は大雨であったらしい)。中央カンテは人気ルートということで1時間以上順番待ちとなり、取り付きは7時半頃となった。その間に上から落石がゴロゴロ、超初心者の方は、でかい石が結構近くに墜落して砕けた時など非常に緊張した。緊張ついでにセルフビレイをメインロープからとらないミスをして坂本さんを慌てさせてしまいさらに緊張。ただ、混雑でペースがゆっくりだったのでようやく落ちつけた。横を見ると凹状岩壁を笹平さん、古山さん、生井さんがするすると登るのが見える。こちらでもカンテをすんなり通過し、チムニーは結構手間取ったが坂本さんの御指南で抜けることができた。しかし四畳半テラス前の核心部で体力を消耗し、その後のクラックでは恥も外聞もなくヌンチャクやシュリングを掴みまくった。終了点にはようやく到着したという感じ。疲れると脱力状態になって登れるモノも登れなくなることを実感した。他の三人は平気な顔をしており、自分の体力の無さを痛感。「慣れればあまり疲れなくなる」と慰められ



中央カンテ上部に行く。

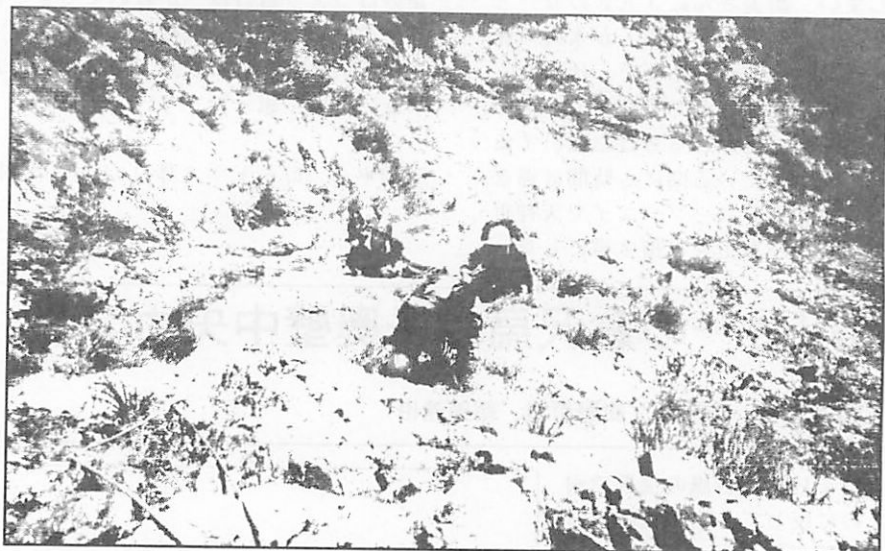
ましたが、本当にそうだといいなあ。天気が心配になってきたので下りは南稜を急いで下降した。前日に下降したときはザイルが回収できなくなったり、空懸でぐるぐる回ってしまったりと、登り以上に体力を使った感じだったが、この日は無事に下降できた。テールリッジに着いてほっとしたのか、その後何回か転んでしまいひやひやしながら（皆様をヒヤヒヤさせながら）駐車場に到着した。

ビレイ、ザイルワーク、ルートファインディング

等々、坂本さんには多大なご迷惑をおかけするとともに、いろいろ勉強させていただきました。

駐車場(5:10)ー中央カンテ取り付け(6:15~7:30)
ー終了点(12:30~13:00)ーテールリッジ(16:00)ー
駐車場(17:00)

(新美 記)



中央カンテ核心部にて

谷川岳一の倉沢烏帽子奥壁凹状ルート

1996. 7. 21

パーティ L. 古山正文、生井一男、笹平 孝

今回一の倉沢に入るのが初めてだったので、期待と不安で一杯だった。駐車場から1時間程で取り付けに着いた。そこには先行パーティの人が沢山いて長い列になっていた。待っている間は上から落ちてくる石にびびりながら2時間程待った。準備をしている時、いきなり古山さんにトップで行けと言われてしまった。岩登りでトップはやった事がなかったので、自分に出来るのかわからなかったけど、とりあえず行ってみることにした。

始めの2ピッチは、中央カンテと同じルートだった。3ピッチ目からは前方の凹状壁に向かって登って行く。上で落石があったらこのルンゼに集まってくる感じなので、急いでこの危険地帯を登って行く。5ピッチ目から右寄りに進んで行く。ビレー点に着き、まず生井さん次に古山さんをビレーしていたら、上からラークと声が聞こえて上

を見ると、勢いのついた30cm位の石がうなり音をたてながら古山さん目掛けて落ちていった。その時私は、本当にぶつかると思うほどだった。幸い、古山さんから2m位隣だったのでほっとした。6ピッチ目は少しルートを間違えて右の方に巻いてしまった。最後の8ピッチ目の上部は浮き石が多くて石を落とさないように慎重に登って稜線に出た。そこで無線交信して、昼食にした。上からみる景色はとても良くて気持ち良かった。

下りは尾根沿いに下って北稜下降ルートで降りた。

駐車場(5:00)ー取り付け(6:00~8:00)ー
稜線(12:00)ー駐車場(14:50)

(笹平 記)

白毛門ゼニ入沢

1996. 7. 21

パーティ L 本図一統、今村宏

下館市役所を出発したのは、午後3時だった。なぜ、こんな時間に出発したかという「宴会に間に合うように早く行こう。」と、本図さんが言ったからだ。その日は、ちょうど海の日であり、夏休み最初の週末だったこともあり、道路は、かなり渋滞していた。テントに着いたのは7時過ぎだった。暫くすると宴会が始まり、酒が進むにつれ、古山さんと本図さんが激論を始めた。が、僕はビール、焼酎、ワインを飲み、酔い潰れてしまったので激論の結末は分からなかった。酔っ払っていたせいで、いつデリカに戻って寝たのか覚えていない。

朝、起きて準備をして車で移動した所で、『お早よう』と、生井さんが言ったので目が覚めた。今までの夢だったか？。頭が重い。体がだるい。また、飲み過ぎた。もう一度、今度は本当に準備して、車で移動した。車を降りて、出発したのは、5:50だった。沢登りをするのは初めてで、溪

流シューズとゴムの靴下が最初は変な感じだった。暫く山道を歩き、湯松曾川を渡り、ゼニ入沢に入ったのは6:03だった。最初は、ひたすらガレ場だった。まだ、日が照っていないにもかかわらず暑かった。昨日飲んだ酒は汗となって沢に流れてしまった。しばらくガレ場を登り、6:30二俣に着いた。もう、1時間ぐらい登ったかと思っていたら、まだ、30分しかたっていなかった。ここにも雪渓が残っていたが、九州出身の僕にとっては、7月に雪があるなんて信じられなかった。その後、暫く登り、6:46にハーネスなどを装備して、7:00からスラブに取り付いた。まだ、この時はザイルは出さなかった。今回は水が少なく、岩登りに比べたら傾斜も緩く、ホールドするところも多かったせいもあり、それほど恐くなかったが、振り返って下を見ると、足を滑らすと、滑り台のように下まで落ちていきそうなスラブだった。水が流れていたら、すごくきれいだろうと

も思ったが、水があったら、めちゃくちゃ恐いだろうと思った。途中、滝が幾つもあったが、横にそれて、ヤブこぎをして登っていった。途中、滝の横を草をつかみながら登っていたら、握っていた草が抜けて「ズズズ」と、体がずり落ちていったときは少しびっくりした。よく考えたら、ザイルを付けていなかったのだから、落ちたらかなりやばかったかも知れない。また暫くヤブの中を歩いて登っていると、回りが全然見えず、沢とは違う方向に進んでいたこともあった。今回はTシャツで登っていたので、兎でも傷だらけになってしまった。幾つものスラブや滝、ヤブを抜け、登山道に出たら、やっと地に足が着いた気がしてホッとした。暫く登山道を登って行くと、頂上らしき所が見えてきた。『あ～！やっと着いた。』と思い登ってみると、その後に、更に高いものがあった。だまされた。頂上ではなかった。その場所で、暫く休んだ後、再び頂上をめざし登山道を登っていき、9:26。白毛門の山頂に着いた。結局、ザイルは一度も使わなかった。山頂は暑くも無く、寒くも無く、昼寝でもしたくなるような良い天気、回りの山もよく見えた。山頂で暫く休み、無

線の交信をした後、10:15。登山道を降り始めた。下りは登山道だから楽だろうと思っていたが、大間違いだった。歩き初めて2、3分もすると汗がボタボタと落ち、そのうち、足が痛み始めた。下のほうを見ると、車などがとても小さく見え、「飛んで降りれたらいいのに」と、何度も思った。1時間ぐらいでつらく苦しい下り坂が終わり、その後、川沿いの林道を歩いていき、12:45。車に着いた。車のすぐそばに川が流れていたのだから、水浴びをすることにした。さすがに雪解け水だけあって死ぬほど冷たかったが、とても気持ち良かった。今回、初めての沢登りだったが、探検をしているみたいでとても楽しかった。次に来る時は釣竿でも持ってきて岩魚でも釣ってみたいものと思った。

新道マチガ沢出合(5:50)ーゼニ入沢出合(6:03)ー二俣(6:30~6:40)ースラブ取り付き(6:46~7:00)ー登山道(9:10)ー頂上(9:26~10:15)ー東黒沢橋(11:45~12:15)ー新道マチガ沢出合(12:45)

(今村 記)

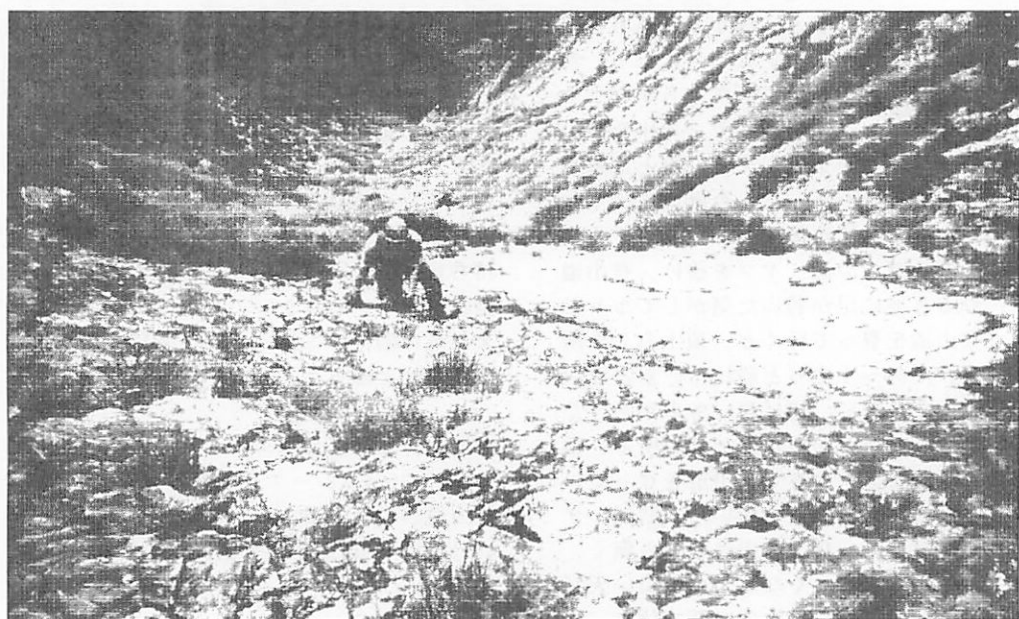
谷川岳北面檜又谷小スラブ

1996. 7. 28

パーティ L. 本図一統、今村宏、菊池光夫

土曜の夜、いつもの様に下館の駐車場に9時集合。辺りを見回すと、今日は年に一度の夏祭りの為、駐車場や付近の道路も混雑していた。市内の道路は規制されたために、ナビゲータ人間と自称する本図が細い袋小路の道路を進む。混雑をさっとぬけさすがに早い。30分は短縮。夜12時前後に土樽の駅に登山計画書を提出後蓬沢をめざす。仮眠を取り早朝6時出発。車を止めたちょっと上の所、ダムへの取水口の所より檜又谷をつめる。最初はガサやぶみたいな所を40分位歩くと、左側に檜又谷があり、斜面の低いところより沢へ下る。河原を約30～40分歩くと大きな雪渓があり、ガスをさかんに発生させていた。風に流されてガスが身体にかかると、熱い体が少し冷えて気持ちよかった。雪渓も30分位つめると、ススケ沢の分岐点の所で、登攀用具を着ける。小スラブはススケ沢の少し下流で山に向かって左側の小さな沢が小スラブの始まりである。水は流れていなかった。少し行くと6～7mの滝があり越せないで左側のヤブ林の中を強引に腕力で灌木帯を進む。この間20～30分あったと思われる。本図氏は早く、どこをどうゆうふうに通ったのかも判らなくなり、声を出し確認する。ぬけて少し行

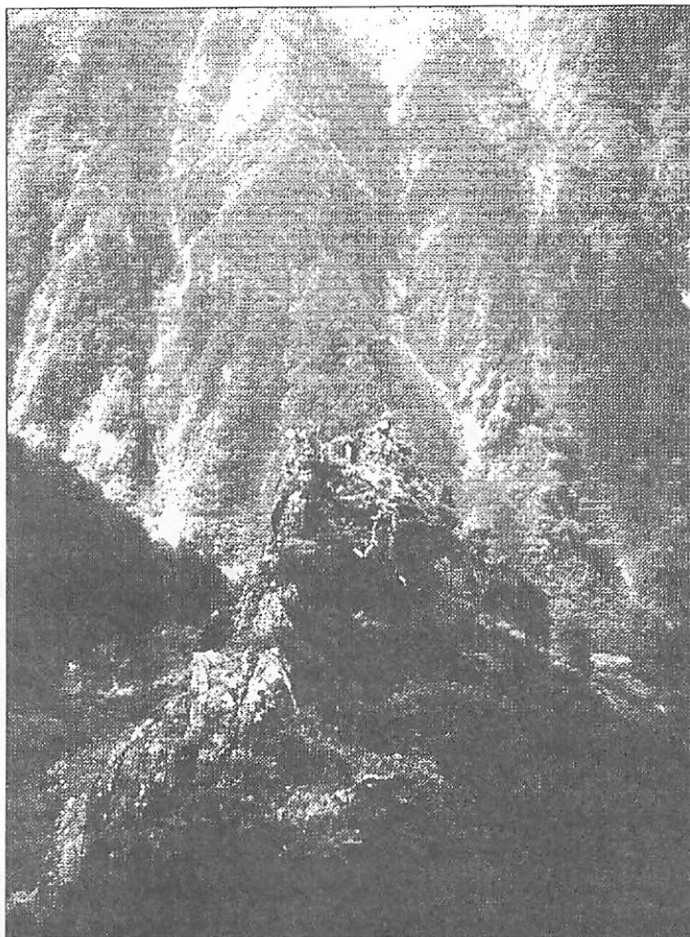
くと小スラブの一番下の部分に着き、これよりスラブの登攀になる。スラブにはかなり草付き部分があり、快適とは言い難い。でも靴をクレッターに履き替えて、フリクションをきかせてよつんばいで登る。今村は元気がよく、トップでグングンと高度をかせぐ。ザイルは着けずに登る。岩登りの時はザイルが有るため注意すればいいが、スラブなどではグレード的には低いがちょっとしたミスでも大事故にもなるので本当に注意が必要である。上部まで登りスラブが終了すると、左側より大スラブが見える。大スラブも小スラブも上部では一緒になる。尾根は痩せており、浮き石もあり注意が必要。蟻の戸渡りみたいな所をクリアして、膝くらいの原生林の所を何箇所かクリアする。かなり体力を消耗する。やっとの事で武能岳の登山道に出る。ちょっと休憩して蓬ビュッテへと向かう。約30分、そこで昼飯を食べ、この日谷川岳衝立岩第一雲稜ルートを登っている古山、中居パーティに午後1時の交信を入れるが、受信しないので急いで山を下りて車へと向かう。車へは3時前後に着き、着替えをして谷川岳一ノ倉沢へ向かう。途中谷川岳ロープウェイ付近で無線の交信ができ、彼らは洞窟ハングの下あたりで頑張ってい



檜又谷小スラブ上部を登る

るとの内容であった。出合で双眼鏡で彼らの姿を探す、双眼鏡に映る2人組のパーティが動くのが見える。その頃雲が怪しくなり雷雨となる。我々は車へ戻り、彼らと交信を待つ。そして交信で洞窟ハングを越したことを確認して、我々は一ノ倉を去る。雷雨は陰しさを増し、かなりの量で雨が降っている。壁の2人組はかなり厳しい登攀と思われる。壁の中でのビバークかな?と思われた。我々も帰りが遅くなったが、家に11時前後に着いた。11時半頃古山氏より無事下山したとの連絡があった。ご苦労様でした。

(菊池 記)



檜又谷ナイフリッジに行く

一の倉沢衝立岩正面壁雲稜第一ルート

1996. 7. 28

パーティ L 古山雅文、中居康展

今年の休みは何処に行こう。古山さんに僕は28日休みなので、と伝えておいたら留守番電話に雲稜第一に行こうとメッセージが入っていた。先月のダイレクトカンテで散々な目にあってはいるのに、やはり病気なのか、とても今の自分では行けませんよと言うつもりが、じゃあ行きましようの返事が出てしまった。雲稜第一ルート。山を始めたばかりの頃、新田二郎の神々の岩場という小説を読んだことがある。あの南博人がモデルで、雲稜ルートの開拓が書いてあった。一の倉の岩場に触れるようになって、岩登りを少々かじるようになって、雲稜ルートという名前は自分にとって特別な、雲の上のルートであるような気がした。

流石にこればかりはだらけた身体ではごまかし方が無い。気持ちばかりのトレーニングをして

その日を待つ事となった。前日は水戸で学会発表、しかし発表よりはるかに山のことを考えると胃が痛むようだった。

27日昼過ぎ、車にガチャを積み込み、ネクタイを締めて学会に出かけた。発表が終わればそのまま下館に集合である。

海水浴帰りの車で50号線は大渋滞である。水戸から下館まで実に2時間半を要した。流石に出発が遅くなった分高速に乗って少しでも時間短縮をはかる。一の倉沢出合には12時半に到着。軽くビールをあおって寝る。

少しうとうとしたと思ったらもう外は白々と明るい。外は快晴、まさに登攀日和である。これから登るルートのことを今だから言えるが逃げ出したい気持ちになった。先月からならばもっと雪

は消えているだろうと思ったがヒョングリの滝どころかまだ手前の道路までどっさり残雪が残っている。テールリッジを何とか日の出前に登り、準備してアンザイレントラスに登る。3人組の先行パーティがすでに登攀開始していて、ルートの的にはまさに我々の登ろうとしている雲稜第一であった。この他2パーティ。一つは本庄山の会ルート、もう一つは雲稜第二ルートを目指しているようである。いずれにしても今日の衝立正面壁は最近にしては大賑わいと言ったところだろう。なんていったって同じ時間帯では烏帽子奥壁に登るパーティよりも多いのだから。

最初の1ピッチ目、2人用テラスまではあっさり登る。それにしてもいい天気だ。こんな日は沢登りに限るなどとブツブツ言いながらビレイする。次のピッチ4級A2、先行パーティが登るまで時間待ちをして、古山さんが取り付く。ハング自体は足が着くとの事でそんなに難しくない、といっていた



衝立岩正面壁雲稜第1ルート下部にて

が実際に登るとなかなか興奮的であった。古山さんが上から見ていて、フィフィの調節が良くないんじゃないかとコメント。確かにあぶみの3段目に乗ってフィフィをセットする時に少々時間を食ってしまう。前回のダイレクトカンテでは、これで腕力を使い切ってしまった。前回の教訓が生かされていないとは、全く準備が悪いとしか言いようが無い。(このいい加減なあぶみとフィフィでこれまで登って来た訳だ。道理でひどく疲れるわけだ。)狭いテラスで新たにフィフィを調整し直して、残りを登ることにした。3ピッチ目は古山さんにトップを代わってもらった。3ピッチ目右上する所で古山さんの乗ったハーケンが折れて墜落。3メートルぐらいで止まったが結構ビレイしている方がグッタリしてしまった。古山さんの登攀意欲は消えることなく猛然とハーケンとボルトを埋め込んで少々時間は食ったもののこのピッチを突破した。調整したフィフィは最初は慣れなかったが意外に快調で、何とか次のピッチのトップをやる元気が出てきたので4ピッチ目はトップを引かせてもらう。左上の人

工から凹角に登る所だが、凹角に移るフリーが悪く勇気がある。フレイクにフレンズを利かせあぶみを乗せ、そっと乗り移ろうとしたらこれがエクステンディングフレイクで、「バシッ」という音とともにフレンズが外れた。冷や汗がどっと出る。ここはその下のクラックにナッツを利かせ、あぶみトラバース。後は快適な人工で小テラスに着く。5ピッチ目快適な人工。だんだんペースが上がってきた。ボサテラスから久々のフリーの凹角、露出感が無いので濡れて少々悪くともガンガン登る。印象的な洞穴ハングが現れる。確か南博人の初登攀時、水が尽きたところをここで潤したという。確かにボタリボタリと水滴が滴り落ちている。古山さんもガンガン登ってきた。ここで気がつく。雲行きが怪しい。遠く雷の音が聞こえる。雲稜ルートはここまで来ると登り切るしかない。何とか雷雨となる前に抜けたい。

最後のA2はどれも錆ついたうんこハーケンでこれでフリー化されたと言うのなら相当の勇気が

いるなあという代物であった。古山さんが『これに乗るのォ〜』と言いつつも登っていく。このピッチから雨が降り初め雨合羽を羽織って這い上がる。雨に濡れた岩は案外に悪く、背後でピカピカと稲光がきらめき、雷鳴が轟くのはどうみても気持ち良いものではなかった。終了18時。衝立の頭19時。ガチャ具を片づけ早々に下降準備をする。かげりゆく日差しの中で一瞬、虹が見えた。

大急ぎで懸垂下降を繰り返すがあっという間に真暗になってしまった。時折遠くの稲光が白く周囲を照らし出すがそんなものは役に立たない。ヘッドランプの明かりだけが頼みだ。コップスラブの手前の空中懸垂でザイルが回収できなくなってしまい、ビバークも覚悟した。何とか最後の1ピッチだけなのでザイルを切っても下降しようと、少しでも長くザイルを残せるように登り返してザイルを引っ張ると、何とそれまでピクともしなかったザイルがスルスルと抜けてくるではないか。これでなんとか安全地帯まで脱出。闇の衝立前沢を這いずるように下降し、本谷の雪渓に立った。

時折稲光が白く染める。奇妙な静けさに中、疲労が限界を乗り越えてまるで夢を見ているような下降であった。

誰もいない駐車場に22時30分着。早々に着替え下館に向かった。北茨城にたどり着いたの翌日の朝4時半であった。改めてあんな状態で良く登れたもんだと思う。今の自分にとっては2ランクぐらい上のルートでは無かったか？というものの自分にとって限界を押し上げるという意味で、後から思えば思うほど印象に残る登攀であった。

一の倉沢出合(4:50)ー中央稜の基部(5:30)ー登攀開始7ツザイレステラス(6:30)ー終了点(18:00)ー衝立の頭(18:40)ー下降開始(19:00)ー一の倉沢出合(22:30)

(中居 記)

アイガー (敗退)

1996. 7. 29

パーティ L今井弘、他1名

アイガーと聞くとすぐ北壁を思い浮かぶと思う。私達が登ったコースはアイガーでも一番やさしいコースと言われている西面と西稜である。ガイドブックによると所要時間は登りに4時間ないし6時間、下降到3時間ないし4時間、と書かれていた。この時間なら富士山の所要時間と変わらないと思い、日帰りできると思った。

7月29日天気晴れ。6時50分グリンデルワルトのテント場を出発。7時19分グリンデルワルト発クライネシャイデック行の始発電車に乗る。クライネシャイデックで電車を乗り換えアイガーグレッチャー駅を8時10分に降りた。ハーネスを着けヘルメットをかぶり駅を出たのは8時30分。すでに3名が前を歩いていた。1時間位歩くと雪渓が出てきた。雪渓を越えると20m位のチムニーが出てきた。ここで前を歩いていた3名に追いついた。3名は雪渓からチムニーに移ることが出来ないでいた。ここで彼らを追い越した。彼らは男性2名女性1名でオーストラリアから来たと言っていた。ここで3名の中の女性が諦めてアイガーグレッチャー駅方面に下りて行った。チムニーにはフィックスロープがぶらさがっていた。フィックスロープはボロボロであてにはできな

かった。ロープを使わずに登れそうなので私が登り、後からパートナーのMrs 佐藤が登った。オーストラリア人も登ってきた。1人は登れたが、1人が登れないいらしかった。その場を去ろうとしたら、オーストラリア人が何やらロープを貸してくれと言ってきた。しょうがないのでロープを貸した。ここで30分もかかってしまった。ロープ持っているのかと聞いたら下のやつが持っていると言った。岩登りしたことあるのか疑問に思った。彼の腰のハーネスを見るとフレンズやヌンチャクなど高価な物がぶらさがっていた。チムニーは2ピッチになっていた。私達は2ピッチ目も難無く登った。また下の方でなにやら言ってきた。またロープを貸してくれと言ってきた。またロープを貸した。上のオーストラリア人が下のオーストラリア人にアラン何とかかんとか、と言っていた。下の男の名前はアランと言ういらしかった。私も『アラン早く登れよ〜』と日本語で叫んだ。また30分位損をした。それから私とMrs 佐藤は必死になって登った。下のミューレンの方向を見るといつものように雲が湧いていた。毎日夕方になると雷がくるので心配になった。さっきまでまったく姿が見えなかったオーストラリア2人組パーティがぐんぐ

んとすごいスピードで登ってきた。私達の登っている場所はルート外でスピードが落ちていた。私の後ろからMrs佐藤が 今井ちゃんルート外しているよと言った。確かに外していた。雪渓の上の方から2人パーティが降りてきたので雪渓の方に修正した。まもなく山岳ガイドと客と判った。山岳ガイドらしき人とオーストラリア人がなにやら話をしていて。Mrアランが私達にガイドらしき人から言われたように身振り手振りで、雷が来るから下りた方がいいと説明してくれた。時計の針は13時35分を指していた。アイガーを半分位登ったと思う。ミューレンの方向を見ると雲が午前中より増えていた。体から力が抜けた、同時に悔しさがこみ上げてきた。下りはMrs 佐藤の後ろを歩いた。アイガーグレッチャー駅に16時に着いた。17時30分の電車に乗り19時頃グリーンデルワ

ルトのテントに着いた。

グリーンデルワルト (始発電車7:19) - クライネシャイデック7:50 - アイガーグレッチャー駅8:10着9:00出発 - 敗退下山13:30 - アイガーグレッチャー駅16:00着17:30電車 - グリーンデルワルト19:00

(今井 記)

メンヒ南東稜

1996. 8. 1

パーティ L 今井弘、他3名

オーバーメンヒヨッホ小屋を朝7時に出発した。雪原をユングフラウヨッホ方向に20分くらい歩くと右に岩場が出て来る。踏み跡のはっきりしている岩場をしばらく登るとナイフリッジの雪稜になっていた。アイゼンを付けロープを出してMrs 流生とコンテで登った。27mのロープは2人でコンテで登るのにちょうどよい長さだ。細い雪稜は右側も左側も数百メートル切れ落ちている。雪稜を1時間半登ると山頂に着いた。前日にオーバーメンヒヨッホ小屋に入ったのが良かったのか高度障害は全く無かった。また天気も良く風も無く雪質も歩きやすかった。そのためガイドブックに

書かれたコースタイムよりも早く頂上に着くことが出来た。山頂からの眺めはベルナーオーバーラントの峰峰はもちろん、遠くには小さくウーリス山群マッターホルンが見えた。下りは登る時よりも慎重に下りた。11時頃には雪原に下りた。明日はユングフラウだ。今日のように登れることを願った。

オーバーメンヒヨッホ小屋(7:00) - 山頂(9:00)
- オーバーメンヒヨッホ小屋(11:00)

(今井 記)

ユングフラウ

1996. 8. 2

パーティ L 今井弘、他3名

朝4時15分オーバーメンヒヨッホ小屋を出発した。闇の中をヘッドランプの明りを頼りに雪原を歩く。星は全く見えない。ただ黙々とユングフラウヨッホ駅方向に歩いた。ユングフラウヨッホ駅近くまで歩いたところで、ユングフラウへ行くトレースが判らなくなってしまう。後から来た2人パーティが左に曲がったので自分達も2人パーティの後を歩くことにした。Mrs 流生が体の不調でリタイヤ。ユングフラウはユングフラウフィレンからロートタールザッテルを登り頂上へ登る

コースと、ロートタールホルンの東北東稜から迂回して登るコースがある。自分達はユングフラウフィレンからオートタールザッテルを登る頂上コースを選んだ。200m前を歩く2人パーティも同じコースのようだ。少しづつ夜が明けてきて、前を歩く2人がはっきり見えてきた。9人パーティがロートタールホルン方向に行くのが見えた。暫くすると前を歩いていた2人が戻ってきて、9人パーティが歩いているロートタールホルン方向に行くのが見えた。どうやらクレバスを越えるこ

とが出来なくてコースを変えたと推測した。自分達3名もロートタールホルンの東北東稜から迂回して登るコースに変更した。やがて岩場歩きとなった。30分位登ると眺めの良い雪稜になった。雪稜からロートタールザッテルまで見え、先行パーティが蟻のように小さく見えた。雪稜からロートタールホルンを右巻にトラバースしてロートタールザッテル着く。ロートタールホルンの右巻トラバースは見た目より急登できつい。先行パーティに追いついた。先は50m位のトラバースになっていた。下を見ると雪の斜面は岩の陰へと続いている。斜面には建築現場のアンカーボルト状の確保点が数カ所設置してあった。トラバースから傾斜約40度の岩と雪壁の登りになった。暫く登ると頂上に着いた。景色は残念ながら何も見えなかった。先行パーティは写真を撮りすぐ下山して行った。自分達は30分位山頂で休んでいた。時折ガスが風に飛ばされ美しいヨーロッパアルプスが屏風の様に見えた。下りもアンカーボルト状の確保点が要所要所に設置してあるので助かった。

ロートタールザッテルを越えロートタールホルンのトラバース付近で小雨が降ってきた。小雨はしだいに雷雨に変わった。すぐ近くで稲妻と同時に雷が鳴った。雷が落ちたら急いでもしょうがない事はわかっていても急いで歩いた。雨の雪原を延々と歩いて14時51分ユングフラウヨッホに着いた。

オーバーメンヒヨッホ小屋(4:45)ーユングフラウ山頂(10:15)ーユングフラウヨッホトンネル駅(14:51)

(今井 記)

谷川岳北面仙ノ倉沢中ゼン

1996. 8. 4.

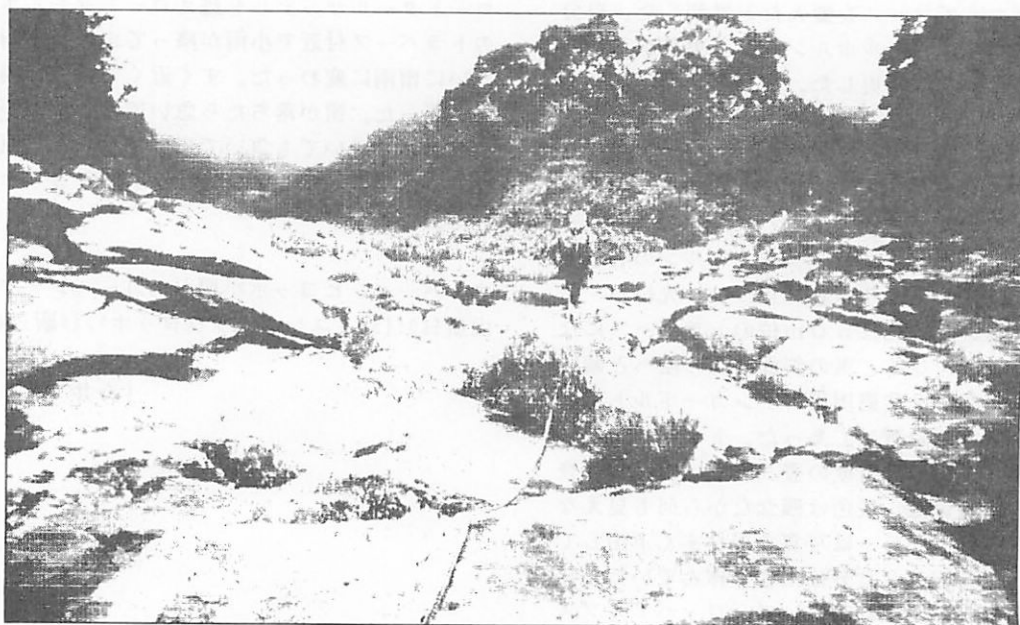
パーティ L 本図一統、古山正文、笹沢ひろみ

今回久々に日曜日に休みが取れたので、暑いので沢に行きたいという私の意見と、岩に熱くなっている古山さんの期待をうらぎることなく、1つの山行で2度おいしいことを期待して出発。

車は林道終点、バックガ平まで入り、その後は平標新道を歩く。約30分程度で入渓地点。目印は大きなケルンだ。いよいよ川河をトコトコ進む。膝下ぐらい浸る程度で途中ナメ滝があったり穏やかな沢だ。街は連日暑いというのに雪があったり、ここはまるで別世界だ。いよいよ目の前が明るく開け西ゼンが見えてきた。西ゼンには他のパーティがとりつく。私たちは中ゼンへ。幅の広い大きなスラブはけっこう急斜面で首が痛くなりそう。登るほどに高度感をましていく。古山さんがトップで私と本図さんが一緒にその後に行く。途中周囲に目を向ける余裕もでてきて、一面黄色いお花が群生しているのに気付く。家に帰って調べたらキンコウカという植物だった。ほっと一息、はりつめた緊張が解けるような美しいお花だった。そのあとはいよいよ15mチムニーで苦しみ、それを過ぎると草付き藪漕ぎで枝尾根に到着。下りは大変に泣けた。何度も懸垂をして降りないと帰れないんだもの……。その中には大きな滝をシャ

ワーを浴びながら降ったりもした。さきに降りて行った本図さんが周囲の滝の大きさにすいこまれるように小さく見えた。こんな風景を見ていると人間はなんて小さいんだろうとしみじみ感じてしまう。降りてしまえばさっきまでの緊張はどっかに行き満足感でいっぱい滝をふりかえる。帰りは駆け足のように下り、途中で大雨が降ろうが気にせず、早く温泉につかりたい一心で車に向かう。

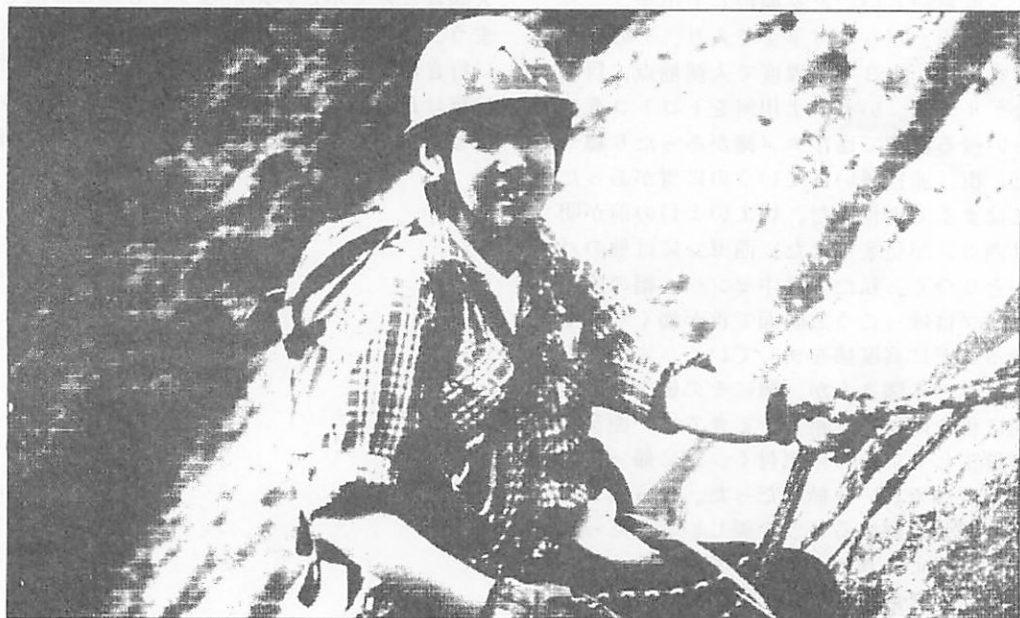
(笹沢 記)



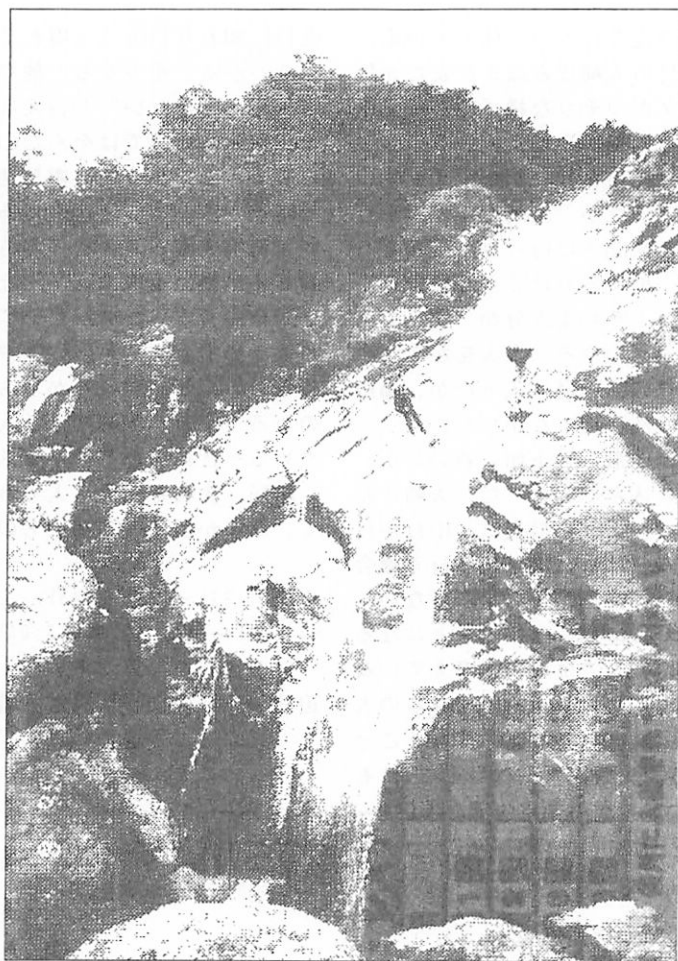
中ゼンを登る。

谷川北登山会へ参加中

谷川北登山会、文芸山古、第一登山、スキー



ピレー中の笹沢



東ゼンの大滝を下降する。

白水沢左俣右沢

1996. 8. 11

パーティ L 本図一統、大崎真奈美

7月某日、大崎さんより電話があった。8月11日か18日に休みが取れるので、山に同行願えませんか。ん？？？、なぜ私に？、電話する人を間違っていないですか？、でも大方の理由はわかってた。私は13日から16日まで合宿なので、どちらかというと11日のほうが都合がよく、その日に決める。「何処か行きたい所でもあるの？」「いえ別にこれといった。でも岩か沢に行きたいです」「んじゃあ夏だし沢にすっか」と決定した。

10日夜、12日には合宿に出発しなければならぬので、合宿のバックギンを済ませ、合宿の装備とダブらないよう準備をして出発する。甲子温泉手前の駐車場には0時頃着く。いつものように酒を飲み始める。大崎さんて、いままで酒のあまり飲めない人と思っていたが、今日の大崎さんは結構すすんでいた。ビールは全然だめだが他の酒なら飲めるん

だと言っていた。

11日早朝、半分寝ながら出発する。温泉宿の庭先に登山届を入れるボックスがあるが、正しくは庭先ではなく国道289号線の一部なのだ。宿先から入渓する。昨晚まで雨が降っていたせいか、思ったより水量がある。2段10m滝をザイルをつけて右岸から登る。ホー！大崎さん結構やるじゃないか！足元はしっかりしたし、岩を登るフォームが良くなった。昨年の逆川の時とは別人のようだ。これも某氏と登っている賜物なのかな？ここからはアンザイレンしたまま行く。直瀑20m、4段30m、3段30mと快適に登る。大崎さんも楽しそうにガンガンついてくる。やはり余裕ができてきたためだろう。今日の白水沢は我々2人の貸し切りである。水が涸れる前に昼食にする。冷麦を作るが、休んでいると少々寒さを感じた。今日の大崎さんはまだまだ元気

れる前に昼食にする。冷麦を作るが、休んでいると少々寒さを感じた。今日の大崎さんはまだまだ元気だが、最後のツメは少々きつそうな様子であった。稜線はさすがに暑かったが風が心地よい。2、3パーティのハイカーと言葉を交わしながら甲子温泉に降りた。風呂に入るか迷ったが、大崎さんではできれば入りたいと言って料金を聞きに行った。「6000両だそうです」「え！泊まるわけじゃないのに、なんでそんなに高いんだ！それ1人分か、2人分か」「へ・・・、うそです」。このやろ、大人をからかうんじゃないねえ。6000円也のお風呂に入ったが、湯舟は大きいものの、ぬるく洗い場もなかった。

道路も空いていて快調に飛ばし下館に着いたが、駐車場に座り込み、話し込んでしまった。大崎さんは次の様なことを話した。「うちの会は、山行が日曜祭日なので、平日休みの私にはなかなか行く機会がない。山行に行かなければレベルもあがらない。するといつまでも皆さんに迷惑をかけることになる。だから退会したほうが良いのではないかと考えている」といった内容だった。現在会員の中で平日休みの人は何人かいるが、お互い連絡をとりあって行くことはせず、いつも同じ人とだけ行っている。それも

会員に知れないよう、隠れて行っている様子がはつきりわかる。そうすると他の者は行きたくても“俺も一緒に行きたい”と言えなくなるのは当然だし、それ以前に集会ではそんな山行計画などぜんぜん発表していない。直前の電話連絡が無断山行（発覚した時点で即クビ）ばかりである。それは某氏の責任でもあり大崎さんの責任でもある。私は率直に「大崎さんがやめるのは寂しくなるが、某氏とよく相談し、結論を出した方がよい。今の状況では大崎さんのためにも会のためにも、やめたほうが良いかもしれない。ただし、これから某氏と一緒に山へ行くのだから、大崎さん1人ではなく、2人一緒にやめるべきだ」とアドバイスした。

結局、大崎さんは1人で8月退会した。正直言って、なにか釈然としないものを感じている。

車発(7:32)―出合(7:45)―二俣(9:21)―昼食(10:57~11:48)―稜線(12:34~13:03)―車(15:23)

追伸…。その後、某氏も大崎さんの後を追うように11月退会した。

(本図 記)

前穂東稜右岩壁古川ルート

1996. 8. 11

パーティ L 古山正文、新美達也

夏合宿先発二日目は奥又白の古川ルートだった。快晴のなか出発。奥又白谷の雪渓を登りC沢をつめる。勾配が急になるにつれて雪渓を歩き慣れない私はどんどんペースが遅れてしょっぱなから足を引っ張ってしまった。雪渓の最後のところで2mほど滑落、古山さんが見るに見かねてザイルを出してくれたのでそれにつかまってなんとか突破する。リッジを越えてB沢に渡り、やっと取り付き点に着く。すでに出発から3時間を経過していた。つるべで、1ピッチ目古山さんがリードする。2ピッチ目、IV級にしては妙に厳しく、どうやらルートを間違えたらしい。3ピッチ目もルートを間違える。こちらへんはどこからでも登れそうで、でも間違えると結構厳しい。4ピッチ目は私がリードしたがビレイポイントが見つけれない。核心の5ピッチ目に踏み込んでしまったり、また引き返したりで時間を思いきりロスする。落ちついて見ればハーケン2本とボルト1本がしっかり打ち込んであるビレイポイントがあった（確かに足場は悪かったのだけれど）。核心の5ピッチ目では、古山さんがリードでAIであっさり抜ける。が、私はあぶみがうまく使えず立ち往生し

てしまう。ゲレンデで本図さんに教わった「段階的引き込み」を実践しようとするが頭では理解していても体が言うことを聞いてくれない。いたずらにフィフィをかけたりはずしたりするだけでいっこうに上に上がらない。結局ザイルで引っ張り上げてもらってなんとか突破できた。この時点ですでに14:00。なんと6時間近くここに取り掛かっていたことになる。

この後Aフェイス上部3ピッチと合流する。いずれも3級程度のピッチなのだが疲労のためにリードができない。結局すべて古山さんにリードしてもらった。やっとの思いで前穂高岳山頂到着、急いで下山する。奥又白への下降点が分かりにくかったことや、雪渓の下りで私が足を引っ張ったこともあって、キャンプ場到着は暗くなる寸前だった。

奥又白キャンプ場(5:20)―古川ルート取り付き(8:40)―古川ルート終了点(14:10-14:30)―前穂高岳山頂(15:50)―奥又白キャンプ場(18:40)

(新美 記)

前穂北尾根四峰正面壁松高ルート

1996. 8. 12

パーティ L 古山正文、新美達也

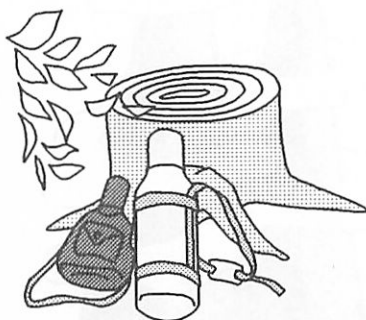
夏合宿で先発として古山さんに奥又白に連れて行って頂いた。入山日を含めて四日間、本隊がくる前にたっぷり登ろうと意気込んできた。が、初日の中畠新道の急坂では息が切れ、二日目の古川ルートでは、アプローチの雪渓で滑落しかけたり、ビレイをもたついたり、ルートを間違えたり、ビレイポイントを見落として次のピッチに踏み込んで立ち往生したり、あぶみが使えなくてザックを引っ張り上げてもらったり、Ⅲ級のピッチが登れなかったりと古山さんに迷惑をかけまくってしまった。三日目は四峰東南壁歯科大ルートの予定だったが二日目の私の不様な様子を見て松高ルートに変更、何とか足を引っ張らないようにと出発した。前穂までの尾根道を20分ほど登って、C沢をつめる。天気が悪いと取り付け点が非常に解りにくいということだったが、快晴でその心配はなし。他のパーティの姿はなく（他のルートには結構いた）、幸先良い出足となる。最初の3ピッチは草付きの緩斜面で何事もなく通過、4ピッチ目が核心の松高ハングだったがそう言われなければ

気づかないうちに通過してしまった。それとも登らずに巻いてしまったのか？いやいやそんなことはないはず。それよりもその先の2ピッチが結構厳しく、ヌンチャクをつかみながらA0で格闘。特に最後のピッチは「これがIV-？」と不平をこぼしつつなんとか突破した。でも苦しい顔をしていたのは私だけで、古山さんは「こんなもんだろ」と涼しい顔をされていた。さらに もう1ピッチのぼして無事に終了。古川ルートと比べるとスムーズに登り終わった。やはり3級上と4級下の間には（私にとっては）大きな壁がある。はやくその壁が破れるといいなあ。その後、北尾根に抜けたが三峰の前で大渋滞に巻き込まれ時間を食ってしまった。（RCCルートに行けば良かったと、あとで古山さんがおっしゃっていた。私は全然気がつかなかった）。明日は涸沢までの移動だけにすることで古山さんと意見が一致、奥又白での最後の夜をのんびり過ごした。奥又白の四日間は私にとって初めての本格的なアルパインクライミングということでたくさんの事を経験させてい

ただいた。身のすくむような高度感、登り終わった後の爽快感、満足感とともに恐さ、難しさ、そして身につければならぬ技術、体力、精神力を痛感した。超未熟な私を辛抱強く指導して下さった古山さんに深く感謝いたします。きっと内心プチプチにキレていたと思いますが……。取り敢えず今度来る時までに人工登攀の練習をつんでおかななくては……………。

奥又白キャンプ場(5:10)ー松高ルート取り付け点(7:20)ー松高ルート終了点(9:45-10:30)ー3、4のCOL(11:10-12:40)ー前穂高岳山頂(14:00)ー奥又白キャンプ場(16:00)

(新美 記)



夏合宿北穂高岳東稜

1996. 8. 14

パーティ L 本図一統、高木博行

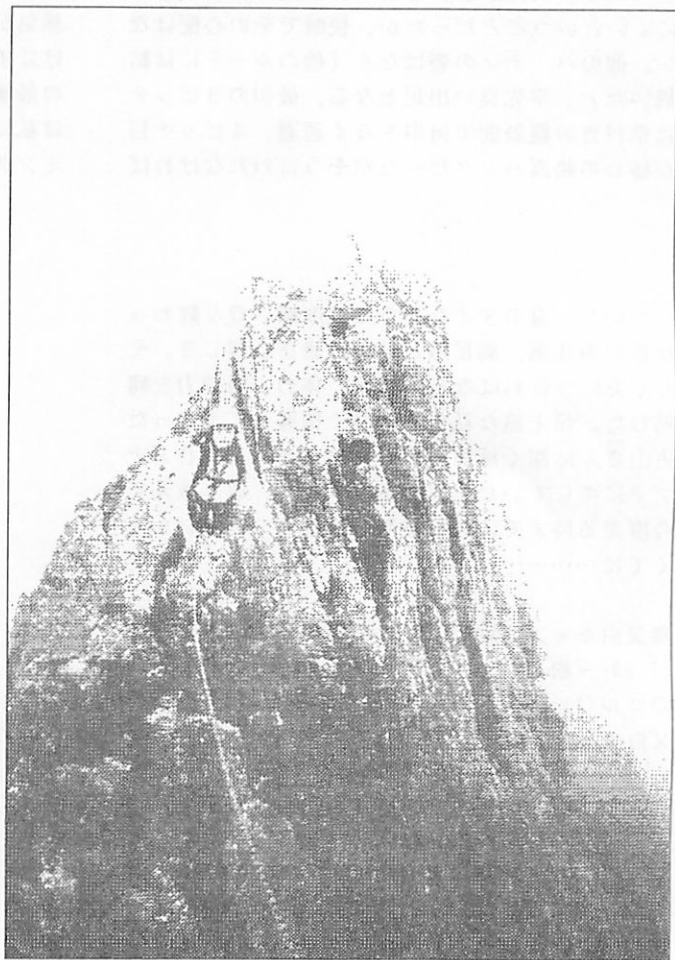
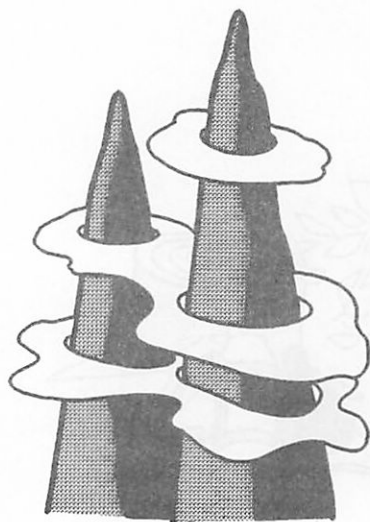
前日、上高地から涸沢に入り朝を迎えた。大勢でテントで寝るのは初めてだったので、体が多少痛んだが気合いを入れて起きた。が、穂高はまだ闇の中だ。初めての北アルプス、出発準備しながらも心臓が期待と不安でドキドキだ。

滝谷を登るパーティと南稜を登るが、やがて東稜の取り付けを目指しトラバースしていく。東稜に着くとクライミングシューズに履き替えて岩稜を登り始める。初めて履いたクライミングシューズのグリップの良さに驚く。これなら自分のような初心者でも上手になった気分だ。核心部のゴジラの背は本図さんのリードでトラバース気味に越していく。あっさりと核心部は終わったしまい、北穂高小屋目指しガレ場を登っていくと、小屋のテラスに滝谷のパーティが雨のため待機していた。しばらく北穂高小屋のテラスで休んでいたが、滝谷のパーティが発案することになったので、本図さんと奥穂高への縦走を歩き始める。小雨とガスで視界が利かず期待していた展望は得られなかった。それ

にしたも本図さんは脚も強い！本当に50歳なのだろうか。穂高岳山荘で本図さんと別れ、一人奥穂高岳の頂上に登ったが雨で他の登山者もおらず、展望も得られない。にぎやかな穂高の印象からは程遠い寂しい頂上だった。

涸沢(4:50)ー東稜取り付け(6:30)ー北穂高小屋(8:45)ー北穂高小屋(10:00)ー穂高岳山荘(11:45)ー穂高岳山荘(12:10)ー奥穂高岳(12:50)ー涸沢(15:00)

(高木 記)



ゴジラの背にて…高木

北穂高滝谷クラック尾根（途中敗退）

1996. 8. 14

パーティ L 古山雅文、生井一男、高田暢年、中居康展、告広道、笹平孝、
紺野哲雄、新美達也、澤田仁

合宿に立つ8月12日、テレビの天気予報を見ると、大型の台風12号が沖縄でとぐろを巻いていた。

13日に涸沢に入ったときは晴れていたが、心配した通り14日は朝からぐずついた天気になった。北穂南稜から北穂小屋に着いた時には、ガスがかかり小雨がぱらついていたので、今日は岩に取り付くのは止めにし、奥穂まで縦走でもするかと言う話がまとまりかけた。ところが、10時頃にふっと雨が止んだので行ってみようと言う事になった。

B沢を下降してクラック尾根の取り付きを探すも、ガスのため周囲の状況が判らず戸惑い、取り付いたのは12時過ぎであった。取り付きのそばに稜線上から落としたと見られるザックが転がっており、皆、これに興味津々であったが、なぜかここでは全員紳士であった。ハングルで書かれたパンフレットが散乱しており、おらく韓国人のものと推測された。

雨の降る中、1ピッチ目のバンドをトラバースし、2ピッチ目の岩壁を登る。ところがここで正規のルートを外してしまい、非常に脆い壁に入り込んでしまった。後続には先行からの落石がビュ

ンビュン飛び、登るときには落石をつかまないように、落とさないように神経を使わされた。ここで誰も怪我をしなかったのが不思議なくらいに思われた。渋滞しながら3ピッチで正規のルートに戻り、順調に進みかけたが、時間切れで撤退することになった。

旧メガネの科尔から懸垂下降でB沢に降り、B沢を登る。北穂小屋に着いた時は夜7時を過ぎており、どっぷりと日が暮れていた。暖かそうな小屋の中で宿泊客がカレーライスを食べようとしている処で、皆、ずぶ濡れで窓のそばに立ち、横目でうらやましそうに見ていた。高田さんは『俺がああ立場だったら、絶対、お疲れでしょう。一口食べませんか？、』と言うよ。と力説していた。雨風強まる中、小屋から涸沢までの下りは大変長く感じられ、幕営地に着いたのは9時過ぎであった。6人用テントのポールは強風で折れてしまい、本図さんが補修をしていた。我々はホッとして眠りに着いたが、翌日はウォーターベッドの上で目を覚ますことになるのである。

（澤田 記）



前穂北尾根

1996. 8. 16.

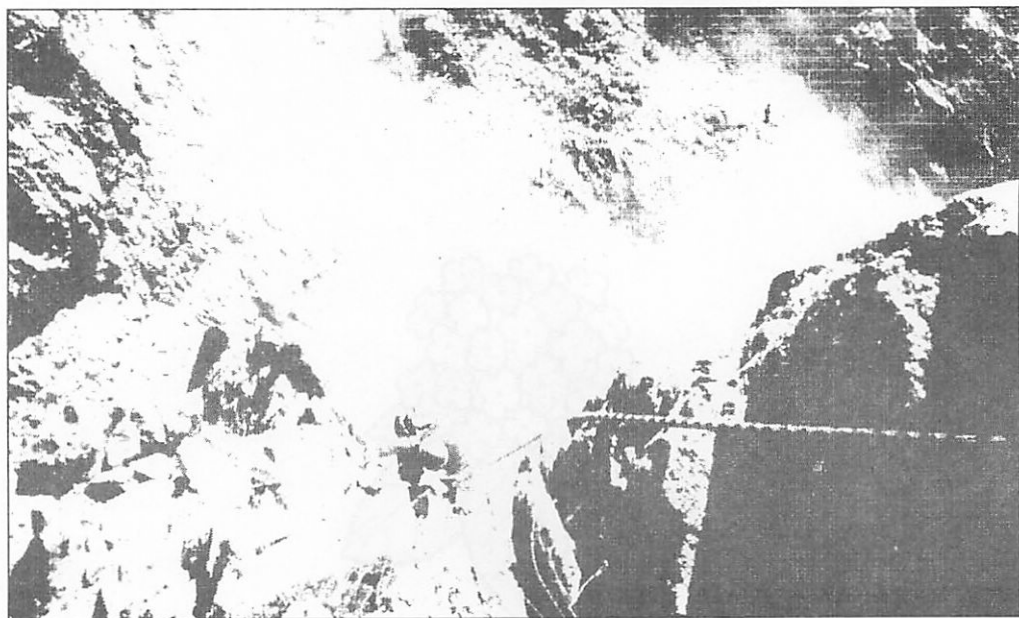
パーティ L 笹平孝、澤田仁、紺野哲雄

台風が通り過ぎ、昨日現れた幻の滝や、テントの下を流れていた幻の沢はいつの間にか消え、空は雲ひとつ無い青空が広がっていた。涸沢の朝は少し寒いくらいで、たぷりと水を含んだ登山靴を履くのはけっこう辛かった。涸沢キャンプ場を出発して雪渓をしばらく登ると左側に五六のコルが見えてくる。そこからはガレ場を登って行くが、道がいくつかあるけれどどこを通っても足場は悪かった。五六のコルに着くと視界が開けて眺めがよかった。そこには先行パーティの人たちがいたが、そこで抜いて、五峰、四峰をちょっとした岩登りのような感じで登って行く。三峰の所で2ピッチロープを出した。1ピッチ目は、フィックスロープがあったのでそれを利用して簡単に登れた。2ピッチ目は、でかいチョックストーンがあってその右側を少し行った所を登った。ここもそれほど難しい所ではなかった。2ピッチ終了した所で、ロープをザックに収めて登り始めた。前穂高岳までは涸沢側にトラバースする感じに進むが、踏み跡がはっきりしないので迷いやすかった。前穂高岳に着いてから暫く休憩して、ここからは吊り尾根を通して、奥穂高岳、穂高岳山荘と歩いた。山荘の所で、三峰の取り付きで一緒になった人と逢

って、ビールや果物をご馳走になった。そのおかげで下りのザイテングラードの登山道で2回も小便をしてしまった。行動中のビールはいろんな危険を伴うと実感できた山行だった。

キャンプ場(5:10)ー五六のコル(6:30)ー取り付き(8:00)ー前穂高岳(11:00~11:50)ー奥穂高岳(13:10~13:50)ー穂高岳山荘(14:30~15:20)ーキャンプ場(16:20)

(笹平 記)



北尾根3峰を登る澤田



北尾根登攀途中にて交信する笹平



前穂高頂上にて…澤田、紺野、笹平

北アルプス屏風岩東壁鵬翔ルート

1996. 8. 16

パーティ L 古山正文、中居康展、高田暢年

さんさんみんなに迷惑をかけた台風もどっかに行ってしまい、昨日と打って変わっての好天気である。今回の滝谷は台風による悪天と私のルートファインディングの失敗により敗退となってしまい1本も登れず。今日くらいともに登らなければ山口からわざわざ高い交通費を出してきた意味がない。休みの都合で今日下山してしまう本図さんたちと固い握手で又再開の約束を交わし一足先に溜沢を出発する。

途中休むことなく一気に下る。昨日までの雨で川は増水していたが、渡れない程ではなかった。ジャージを膝までまくり上げ対岸まで徒渉するが夏とはいえ水は冷たい。

1 ルンゼ押し出しから樹林帯の中をどんどん登り詰め屏風の取り付けを目指す。まだ取り付いているパーティはいない、どうやら我

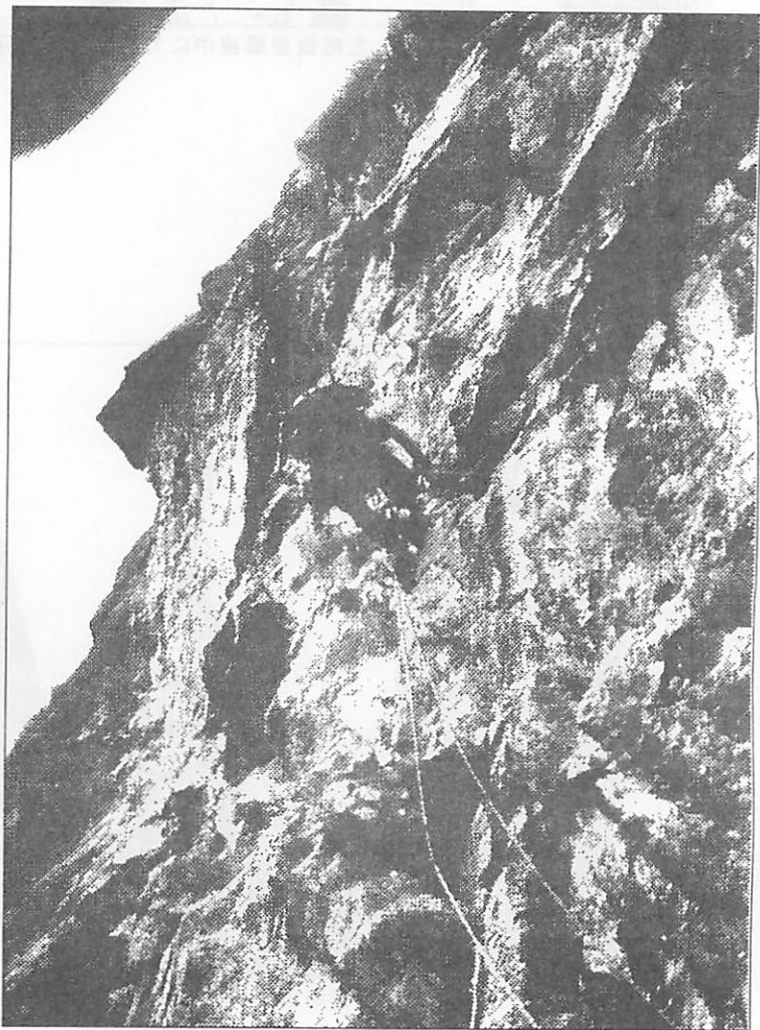
行を満喫させて頂きました。

T4で8時の無線交信を行う。本図さん達は岩小屋跡付近にいて我々を見上げているとのこと。鵬翔ルートはT4から草付きバンドを左に少しトラバースし凹角に取り付く。ここより人工が始まる。A1、2ピッチで大テラスに着く。すぐ右には扇岩テラスがあり、雲稜ルートを登っているパーティが見える。トップの古山さんが40m A2の前傾壁をリードしてる間、私はビレーを中居にまかせその間先日までの雨で濡れた物を大テラスに広げ乾かしながら、写真を撮ったり中居をいじめたりと、有効に待ち時間を使った。

このあともA1人工のルートが3ピッチ続くが、単調なアブミの掛け替えでさほど雲稜ルートと変わらないような気がした(セカン

々が1番のりのようだ。T4尾根取り付けで登攀具をつけザイルを出す。準備をしていると続々と後続パーティが登ってくる。何処に登るのか聞いてみると雲稜、東稜ルートで鵬翔ルートは他にはいないようだ、貸切りである。

いよいよ登攀開始。トップは当然のごとくチーフリーダーの古山さんである。最近は山道具オタクと呼ばれているとの事。(持っていない山道具は無いらしい。) ビレイヤーは雨男ことDr中居である。(そういえば一昨年の夏にも今回のメンバーで屏風に來たとき雨が降ると中居を散々いじめたっけな〜。) 私はカメラ片手に気楽なお客様山



鵬翔ルートの核心部を登る

ドで気楽に登ったせいもあると思うが)

最後は草付き帯に入り終了となる。結局鵬翔ルートは我々1パーティだけだったが、雲稜ルートには3、4パーティ取り付いており扇岩テラスで渋滞となっていた。

早々に登攀道具をザックに片付け、屏風の頭を目指す。ここは何度登っても登攀が終了した後の緊張感から解放された体には辛い登りである。

屏風の頭から涸沢のベースキャンプで待つ笹平君達と無線交信を交わしビールを予約する。後は頭の中はビールの事だけを考えながら涸沢へと下る。今回はなんとか明るいうちにテントに戻ることが出来た。過去2回屏風を登った時は横尾がベースだったので、ベースに戻るのが又一苦労だったが今回は少しは楽である。

テントに戻ると涸沢での夏合宿最後の夜の宴会

を行う。我々が酔っていい気分になっているころまだ屏風の頭にヘッドランプの光が見える。おそらく雲稜ルートのパーティだろうと思われる。

翌日は松本駅で古山さん達と別れ山口まで一人寂しく帰った。

ACC-J 茨城の皆さん大変お世話になりました。またいつか一緒に登れる事を楽しみにしていますのでその時はよろしくお願いします。

涸沢出発(4:30) - 1ルンゼ押し出し(5:40) - T4尾根取り付き(6:30) - T4(8:00) - 大テラス(10:00) - 終了点(15:07) - 屏風の頭(17:05) - 涸沢(18:15)

(高田 記)



鵬翔ルート登攀終了・・屏風の頭にて

甲斐駒ヶ岳尾白川黄蓮谷右俣

1996. 8. 30~9. 1

パーティ L 古山正文、新美達也、澤田仁

月曜日、古山さんから『次の週末は、黄蓮谷右俣にしよう。』と電話があった。前の集会で自分が『今度、黄蓮谷右俣に行ってみたいですね。』と言ったからであるが、まさか今回行くことになるとは思っていなかったの思わず『いいんですか?』と聞き返してしまった。少し引け目を感じながら甲斐駒ヶ岳の地図を引っ張り出してみると、稜線や沢筋に鉛筆で書き込みがしてあった。そういえば6年前、学生の時に一度行こうと計画を立てたが、何かの事情で取り止めたのを思い出した。

30日。(金)の夜、9時に筑波を出発し、中央道経由で南アルプスへ。駒ヶ岳神社の手前にある駐車場で仮眠する。途中でビールを買い損ねたので、すぐ寝る。

31日、朝6時から4時間かか

少し離れたヤブから枯れかけた木を折りシュリングで束にして運んだため、薪集めに1時間がかかってしまった。早速焚火を起こそうと古山さんが色々苦心するが、薪が生木である上濡れているのでなかなか火がつかない。そのうち雨が降ってきたので、テントマットをひっかぶって三人で格闘する。『チューブメタが良くない!』という新美さんは固形メタを使い、『焚き付けが悪い!』という自分はロールペーパーを燃やし、挙げ句の果て『船頭が多くいて火がつかない!』と古山さんが言う始末。しかし2時間の格闘の末ようやく火がついた時は、「三人寄れば文殊の知恵」だなと感心した。

雨もやんだので、焚火を囲んで夕飯を食べ、酒盛りをする。空は晴れ、月の光がナメ滝を照らし出し、とても素敵な夜になった。古

って黒戸尾根を五合目まで登り、そこから尾白川に下る。千丈ノ滝の上に出た後、登攀具を身に付け遡行開始。黄蓮谷は明るく開けた沢だが、周囲は時々ガスがかかり、快適とは言い難い。皆、濡れるのが嫌で、直登できそうな滝でも脇のブッシュから巻き気味に登っていく。奥千丈の滝に入る頃から観念して水流の中をシャワークライミングする。美しい花崗岩のスラブとナメ滝が延々と続き、大変気持ちがいい。奥千丈ノ滝を通過する途中、左岸に快適なビバークサイトを発見。しかしながら、かなり傾斜のあるナメ滝の中断にあるテラスなので周囲に薪となる流木がほとんど無い。



黄蓮谷・奥千丈滝付近にて・古山

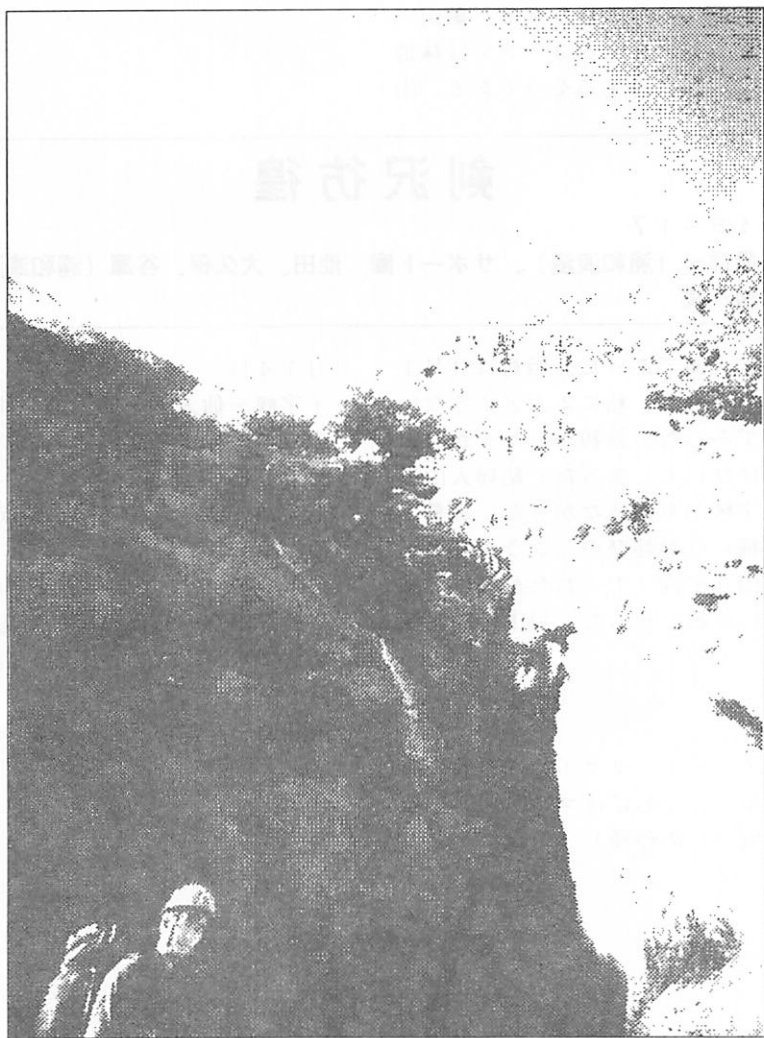
山さんは火を見ると興奮するらしく、とても上機嫌である。『俺はいつも、焚火をするために沢に行くんだ。この火の色を良く覚えておけよ。』と言ってはウオッカをガバガバ飲む。其の内かなり酔ったらしく、『馬鹿たれがぁ。』を連発したかと思うと『あれ？他の人たちはどこ行ったの？』『告君、告君。』とか訳の分からないことを言い出す。其の内『おまえ、俺のことを邪魔っけだと思っているだろう。』とからんできたので、やばいと思った二人はさっさと焚火の横でシュラフカバーに潜り込んだ。古山さんは焚火を見ながら、一人でずっと『馬鹿たれがぁ〜。ブツブツ……。』と言っていた。

翌日、9月1日は天気もよく、快適にシャワークラミングしていく。古山さんは夕べウオッカを

500mlも空けたのに全く平気なので、改めてすごいと思ってしまった。奥の滝を左岸から大高巻きし、つめのガレ場を登って行くと、あっけなく黒戸尾根に出た。谷のスケールは予想していたより小さく、古山さんは『この沢は本当に3級なの？』と言っていたが、ナメ滝が大変美しく、それなりに満足できた。

すぐそばの甲斐駒ヶ岳のピークを踏んだ後、黒戸尾根を下る。黒戸尾根の登山道はほとんど樹林帯の中で、退屈な下りが延々と続く。4時間かけて2000mを下り切った後は、皆うんざりという感じだった。

(澤田 記)



黄蓮谷・奥千丈滝途中のビバークサイトより上部を望む

皇海山

1996. 9. 8

パーティ 古山正文

仕事の状態によっては、日曜日に動ける本図さん笹沢さんとは一緒に行けない可能性があったので、集会では一応山には行かないことにしておいた。しかし、なんとか仕事に一段落をつけ、土曜の夜9時半に家に帰り準備をして皇海山にトレーニングに向かった（決していわゆる100名山に登るために行った訳ではなく、あくまでもトレーニングである）。松木沢まではよく行くが、その先の庚申川には入ったことがなかった。かじか荘まで車で入り、仮眠を取る。明るくなって出発。車道を歩き登山口に着く。庚申山荘から庚申山～鋸山～皇海山と4時間10分で登りきる。鋸山～皇海山の間のコルから登ってくるコースでは林道終点から1時間半で山頂に達するそうである。山

頂から見える国境平の草原は松木沢を詰めたときのビバークサイトとしては快適そうだ。20分ほど休んでから下る。鋸山からは六林班峠へ向かうが、笹が深くて閉口した。さらに峠から庚申山荘まではずっとトラバースぎみでなかなか高度を下げない。足が痛くなってきた頃山荘に着いた。足を引きずりながら車に戻った。下り4時間。登りも下りも時間に変わりがなかった。

かじか荘(5:00)－皇海山(9:20～9:40)－かじか荘(13:40)

(古山 記)

剣沢彷徨

1996. 9. 13～17

パーティ L高桑信一(浦和浪漫)、サポート隊 池田、大久保、谷澤(浦和浪漫3名)、本図一統

今回の計画は剣沢大滝であった。当初は9月12日からの予定であったが、私によんどころない事情が出来、一日ずらした。最初からケチがついてしまい、これがひびいてしまった。結局入山日が雨で増水し、十字峡から動けなかった。高桑さんとサポートの皆様にはお詫びのしようもないが、そんなこと微塵も出さず迎えてくれた浪漫には感謝してもしきれない位嬉しかった。以下行動記録だけを記す。

9月13日

扇沢～黒部トンネル～インクライン(整備の為2400段の階段を歩く。これにはマイッタ)～仙人平～十字峡(雨のため停滞)

9月14日

十字峡～仙人平～仙人湯～仙人池(こんなにバテたのは今まで記憶に無い)

9月15日

仙人池～池の平～二俣～剣沢大滝上部偵察～真砂沢出合

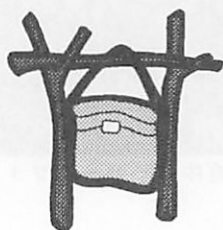
9月16日

真砂沢出合～剣沢小屋～別山～内蔵助小屋～(北アらしくない登山道)内蔵助平

9月17日

内蔵助平～黒部ダム～扇沢

(本図 記)



剣岳源治郎尾根Ⅰ峰中谷ルート、本峰南壁Ⅱ稜

1996. 9. 14~16

パーティ L 古山正文、笹平孝

9/14. お正月に早月小屋にデポした物を回収しに剣岳に行くことにした。扇沢に午前2時過ぎに着いた時には雨が激しく降っていた。前前日から剣の大滝に入っている本図さん達はどうしているだろうか。朝、雨は小降りにはなっていたが止んではいなかった。我々は室堂まで交通機関を利用するつもりなので、少なくともそこまでは雨に濡れずに済むし、雨宿りもできる。室堂に着く頃には雨は止んで日も射し始めていた。雨止み待ちする事なく、出発。昼過ぎには別山平に着いた。ツェルトを張って、取り付きの確認に行こうとしたが、小雨がばらついてきたのとガスっていたのとで止めにした。3時の無線交信時に浦和浪漫の会話が聞こえ、真砂沢と仙人池に2パーティ入っているようだった。剣の大滝にいる本図さん達とは交信できないだろうから、浦和浪漫のサポート隊は2パーティになっているんだと勘違いしてしまった。5時の交信時間に無線を傍受していたら、仙人池にいるパーティはどうやら本図

さん達であることが判り、こちらからも発信する。増水のため剣の大滝は中止にして十字峽から仙人池に移動したらしかった。デポ回収で荷物が重くなることを考え、シュラフは持ってこなかった。この夜はシュラフカバーだけでは寒かった。

9/15. 夜明けと共に出発。直接テン場から剣沢に下った為トイレの排水口が剣沢に垂れ流しの所を通ることになってしまった。水は黄土色に濁っていたが、100mも下ると薄まってきれいな水の様に見えた。雪渓がでてきたところでアイゼンを付け、取り付きに向かう。中谷ルートは左側に大ハングがあるので取り付きはすぐに判った。雪渓から岩場に移ったすぐの所で登はんの準備をして取り付く。1P目、階段状。2P目は、フリーと人工の2つのラインがあるがフリーのラインは前日の雨のためか水が染みでいるので右の人工のラインを登る。3P目は左ヘトラバース気味に登る。4P目は、上から水滴の垂れている濡れたスラブを直上。5P目は、5

級のスラブのトラバース。ランニングビレーはしっかり取れるし、残置のシュリングもある。6P目は、再び2つのラインが取れ右の草の付いたルンゼ状を登るが、岩が脆く崩れているところもあり、1本ハーケンを打って抜ける。7P目は、3つのラインに分かれていて我々は一番右のラインを登る。笹平君はルートに自信がならしく途中でピッチを切り、トップ交代する。大きなチョックストーンの下にビレー点がありそこでピッチを切る。8P目、チョックストーンの下をくぐって抜ける。9P目は、スラブを登り、終了。ロープをしまい少し登ると源治郎尾根に合流、この時既に12時を過ぎていたので、名古屋大ルートの継続は中止にして源治郎尾根をそのまま本峰まで登ることにした。木苺がたくさんあって、口一杯にそれを食べながら登る。Ⅱ峰の下りで懸垂をして、ヘロヘロになって本峰に着いた。早月尾根の分岐に登攀具をデポし、尾根を下る。暗くなる前に早月小屋に着いた。早々デポ品を回収に行くが全くきれいになくなっていた。缶を木に縛っていた紐もなかった。重いデポ品を背負わなくともよくなって嬉しいような、しかし残念なような複雑な気持ちだった。水は小屋で1リットル300円で買わなければならなかった。夜は寒さ対策でテント

マットを上にかけて寝たが、結構有効だった様に思う。

9/16. 早月尾根を登り返す。デポ回収品がないので身は軽い。2時間で本峰分岐まで登り返し、時間がありそうなので本峰南壁Ⅱ稜を登ることにする。平蔵谷コルで荷物をデポし、登はん準備をして取り付きへと下る。4ピッチ、スタックで登りロープをしまう。後は浮き石に気を付けて稜を登る。本峰には登山者が大勢いて、我々は拍手喝采を受ける。本峰頂上からは室堂に向けて下るのみである。最終の1つ前のバスにタッチの差で乗れず、結局最終便で扇沢に戻った。

9/14 扇沢(7:30)ー室堂(9:30)ー別山平(12:30)

9/15 別山平(5:30)ー中谷ルート取り付き(7:30)ー終了(12:30)ー本峰頂上(16:30)ー早月小屋(18:00)

9/16 早月小屋(6:00)ー本峰分岐(8:00)ーⅡ稜取り付き(8:50)ー本峰頂上(10:30)ー室堂(15:30)ー扇沢(17:30)

(古山 記)

〔白毛門集中〕湯檜曾川本谷（A班）

1996. 9. 28~29

パーティ L 古山正文、今井弘

飲み放題食べ放題の怠惰な生活をしていたら体重が70kgになってしまった。身長163cmの私には肥りすぎだ。たっぷり脂肪をつけた体で待ち合わせ場所の下館に10時55分に着いた。すでに古山さんは私を待っていた。荷物を積み替え11時に下館を出発した。土合駅の先の新道に午前2時に着き仮眠した。6時30分起床、7時30分に出発した。湯檜曾川沿いの新道を30分位歩いたあたりで武能沢出合にて湯檜曾川本谷に入った。天気はいいが沢の水は冷たい。私たちの他にひとり前を遡行しているようだった。石の上に足跡があった。2時間で十字峡に着いた。時間もたっぷりあるので景色を楽しみながら大休止。30分位休んだ。十字峡から先は美しいナメと釜が続いた。やがて10mの垂直の滝に出た。ルート図によると3ルートとれると書いてあったが、私たちは高巻いた。3ルートはどれも冷たい水に腰まで入らなければならないのである。高巻も楽ではなかった。滑りやすいドロ斜面を確保しながら滝上に出た。次の40mの滝も1ピッチロープを使った。その後は膝下くらいの深さで紅葉を

眺めながら歩いた。ビバーク地の二俣がなかなか見つからなかった。時間は15時を過ぎていた。高度計を見ると1500m。二俣は通り過ぎてしまったようだ。ふたり手分けしてビバーク場所を捜した。やっと捜した場所は沢から15分左岸に登ったところで、寝返りをするとずるずると落ちそうで気持ちが悪かった。翌朝は7時30分にビバーク地を出発して朝日岳の山頂に8時30分、1時間足らずで立つことができた。朝日岳の山頂で1時間半時間を潰し、白毛門で2時間待ちし、本図さんパーティと坂本さんパーティと合流して下山した。駐車場に3時10分に着いた。今回の遡行は湯檜曾川の源流を自分の目で見る事ができたと言う意味ですばらしい山行だった。またどこかの川の源流を見に行きたいものだ。

魚止滝(8:00)―十字峡(10:00)―大滝(13:00)―ビバーク地(15:30~7:30)―朝日岳(8:30)

(今井 記)

〔白毛門集中〕大倉沢（B班）

1996. 9. 29

メンバー L 坂本昭裕、紺野哲雄、新美達也

当日は5:00起床。7月に谷川岳に来た時は、5:00の歩き出しでも十分明るかったのに、ずいぶん日の出が遅くなったなぁと感じながらヘッドランプをつけて飯を食う。

5:45に出発し、1時間歩いて武能沢出合に到着。ここで登攀道具をつけて湯檜曾川に入る。天気は快晴だし、暑くも寒くもなく、沢から見上げる溪谷の景色は抜群で快適だった。とくに十字峡手前のナメ滝は絶景で感動した。十字峡で大倉沢に入る。いよいよここから本番である。小さな滝を越していくと目の前に40m大滝が見えた。ガイドブックでは「高度感があるので必要ならザイルを出す事」などと書いてある。しかし下から見てもホールドが豊富だし、足場もしっかりしていそうだったので、「とりあえずノーザイルでいこう」との坂本隊長の判断に従って登り出す。確かに高度感はあったが、特に危険なところはなかった。滝の右側をのぼり、途中から左へトラバースして直登して滝を抜けた。

この先はスラブのはずだったが、目の前には大きな雪渓が見えた。この時期にこれだけ雪が残っているのは異例らしい。紺野切り込み隊長が偵察し、右側から行けそうとの事。雪渓と壁との境を慎重に歩き、無事突破。と思ったらまだ雪渓が続いていた。しかも今度はうまく巻けそうもない。やむなく雪渓の上を歩く。途中雪渓から雪渓への飛び越えがあって恐かった。二俣から左に入りしばらく行くと、4mの滝があった。直登できそうだったが、滝壺がかなり深そう。少し前の左側の壁にシュリングがあった。どうやらここから登ってトラバースするのがルートらしい。登り出したが上で行き詰まりになり、挙げ句の果てに落ちこちた。かわりに坂本隊長がトップで登り、的確な指示をして頂いたお陰でなんとか登れた。が、その後は恐怖心で腰がひけてしまい、そうなるまですます滑りやすくなる悪循環に陥った。おかげで皆様のペースをすっかり乱してしまった。すいません……。とりあえずセカンドにしてもらっ

て歩く。チムニー気味の滝があって結構手間取る。
(ガイドブックには4mナメ滝とあったが、どうみてもナメ滝には見えない)。源頭に11:00到着。私は腹が減ってどうしようもなかったのでここで昼飯にしてもらって、大休止。登攀具もしまう。ここから30分歩いて稜線に出た。ここから一般縦走路を歩いて白毛門に到着。湯松曾川本谷組、白毛門沢組と合流して下山した。落っこちた時にかかとを打って結構痛かったので、下りの時はずいぶんと時間

をかけてしまい皆様に迷惑をかけてしまった。本図さん、杖をありがとうございました。
マチガ沢出会(5:45)－武能沢出会(6:45-7:05)－十字峡(7:55)－40m大滝上(8:45~9:05)－二俣(9:45)－源頭(11:00~11:30)－稜線(12:00)－白毛門岳(13:15~13:50)－駐車場(15:15)

(新美 記)

〔白毛門集中〕白毛門沢(C班)

1996. 9. 29

パーティ L本図一統、澤田仁、今村宏

朝5時『そろそろ起きようか』と言う声で目が覚めた。9月とはいえ、朝はとても寒い。『こんな寒いのに沢登りをするのだろうか?』と思った。テントには4人、車には2人寝ていたが、テントの中の私以外は別のパーティで6時前には出発する予定だったので、私も一緒に起きてしまった。僕らのパーティは7時起きのできだったので、待っていた間に釣りをすることにした。話には聞いていたのだが、魚は全然いなくて、全然つれなかった。

朝7時、車で寝ていた2人が起きたので、車に乗って土合まで移動した。それから用意などをして、7時53分に出発した。日が照ってきて、暖かくなって来たけれども、水は冷たい。最初は大きい岩上を歩いていき、30分ぐらい歩いたところでハーネスをつけた。しばらく行くと東黒沢とのわかれ目に着いた。白毛門沢は水で削られたスラブに水が流れていて、とてもきれいだった。また、雪崩のせいかも知れないが、木があちこちで倒れていた。小さい滝を登るときなど、その上を歩いて行けて便利だったが、一回滑り落ちそうになった。岩もツルツルで、つかむ所が無く、よじ登っていると、手が滑り腰の辺りまで水に浸かってしまった。冷たかった。そこまでは、難しいところもなく登っていたが、目の前に8mの滝が現れた。ここで、ザイルを出した。ザイルを出すのは3ヶ月ぶりだったので、結び方などすっかり忘れていた。澤田、本図、今村の順で滝の右側から登った。僕は最後だったので、本図さんが切り切るのを待っていたら、体が引っ張られた。ザイルの長さが足りなくなってしまったのだ。あわてて登り始めたが、前を登っているのが本図さんだったので、ザイルに引っ張られっぱなしだった。途中、水をかぶったりしたので指の感覚がだんだん

ん無くなってきた為、急いで登った。滝を抜けてしばらく歩くと、今度は15mの大滝(たらたらのセン)に着いた。ここで、再び、ザイルを出し、ビレーの為に滝の下にハーケンを打った。初めてハーケンを打ったが、抜けないように打つのは難しかったが、それ以上に打ち込んだハーケンを抜くのはもっと難しかった。これを岩にへばり着いた状態でやらなければいけないかと思うと練習しないといけないと思った。この滝はハーケンが見つけ難くルートを探すのが難しかった。下から登っているのを見ると登れそうな所でも、実際に登ってみると、ホールドするところが無かったり、オーバーハングしていたりして結構難しかった。しばらく歩くと映画のインディジョーンズに出てくるような巨大な岩が沢の真中のゴロンとあった。あの岩が転がってきたら逃げられないだろうなと思いつきながら横を歩いていった。頂上が近づくにつれ、水が少なくなってきたので、水汲みをかねて食事にした。食事の後は、ひたすらスラブを登った。傾斜は結構あったが、ホールドするところがたくさんあったので、登りやすかった。途中、無線の交信のため一回止まっただけで、一気に頂上に抜けた。白毛門山頂での集合時間は2時だった。1時20分に着いた。しかし、僕らのパーティが一番最後だった。朝ゆっくりしすぎたからだろうか? 白毛門沢はザイルを出すところもあり、スラブもきれいで、ヤブこぎもほとんど無く登って楽しめる沢だった。帰りは、他のパーティと合流して下山した。途中、キノコを探しながら降りていったが、毒キノコばかりだった。

車発(7:53)－頂上(13:22)

(今村 記)

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO. 135, 1996. 7 B5 42P 浦和浪漫山岳会

1996春の集中三国川水系・下津川カラカケ沢～ネコブ山、三国川下銅倉沢～ネコブ山、三国川桑ノ木沢～桑ノ木山など、Manthly Reportでは那須・苦土川井戸沢～流石山～三倉川左俣右俣、苦土川大沢西沢～三倉三左俣右俣、丹波川徒渉訓練、奥秩父・一ノ瀬川大常木谷、竜喰谷、川内・五十母川赤松沢左俣右俣、白毛門沢ほか

◎Rohman NO. 136, 1996. 8 B5 68P 浦和浪漫山岳会

1996早出川大集合夏合宿・広倉沢左俣、割岩沢、夕沢、割岩沢西俣沢、容ヶ谷左俣、小割岩沢など、Manthly Reportでは丹沢・小川谷廊下、上越・毛渡沢大滑沢、巻機山米子沢ほか

◎Rohman NO. 137, 1996. 9 B5 38P 浦和浪漫山岳会

桑原山塊・桑木沢～栃方森山、谷川・赤谷川本谷、会越・幽ノ倉沢左俣本流、川内・谷沢川ヨモギ沢左俣～谷沢大清水沢、持倉沢、奥利根・樽俣川ほか

◎月報・ZAC NO. 172 1996. 1, B5 16P グループ・ゼフィルス

裏岩手連峰・網張スキー場～八幡平～後生掛温泉、上州・岩鞍スキー場～武尊山～水上高原スキー場、湯の丸山～鹿沢スキー場ほか

◎月報・ZAC NO. 173 1996. 2, B5 14P グループ・ゼフィルス

会津・大中子山～木賊温泉、奥武蔵・高尾山クロカン、南会津・高杖スキー場～黒岩山～台鞍山スキー場ほか

◎月報・ZAC NO. 180 1996. 9, B5 10P グループ・ゼフィルス

船形連峰・大倉川笹木沢ほか

◎わらじ NO. 484 1996. 7 B5 18P わらじの仲間

荒船山集中・星尾川道場沢右俣、底瀬川、相沢川左俣左沢など、6月の富士山、沢とレスキューほか

◎わらじ NO. 485 1996. 8 B5 18P わらじの仲間

沢とレスキュー(2)、船形連峰・大倉川笹木沢大行沢ほか

◎わらじ NO. 486 1996. 9 B5 50P わらじの仲間

1996夏合宿・奥沢谷南ダル沢～倉沢、所ノ沢、信濃俣河内、赤石沢、聖沢奥聖前聖の滝沢、栗代川、易老沢、リンチョウなど、川内・逢底川、今早出川ガンガラシバナ、中杉川、笛吹川東沢ほか

◎逍遥 NO. 62 1996. 7 B5 32P 逍遥溪稜会

丹沢・四十八瀬川ミズヒ沢、小草平ノ沢、奥秩父・一ノ瀬川大常木谷、大洞川樺谷、井戸沢、両神山神流川金山沢右俣、丹沢・エビラ沢、奥多摩・南秋川矢沢軍刀利沢、奥秩父・鶴冠谷左俣本谷、一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢、那須・苦土川井戸沢、地域研究(和賀山塊)ほか

◎逍遥 NO. 63 1996. 8 B5 30P 逍遥溪稜会

奥秩父・笛吹刀ナメラ沢、入川真ノ沢、南秋川・矢沢熊倉沢左俣、大菩薩・葛野川大菩薩沢、和賀山塊・生保内川、地域研究(朝日連峰の沢)ほか

◎逍遥 NO. 64 1996. 9 B5 18P 逍遥溪稜会

苗場・清津川釜川右俣、南会津・実川硫黄沢、赤谷川本谷、夏合宿・赤川八久和川本流、三面川岩井又沢、畑沢、悪天により赤川八久和川中俣転じ縦走ほか

◎Next! No. 7 1996. 7 B5 26P 山岳溪流釣り集団むげん

八幡平・大沼～国見台～大深沢～湯田又沢～伝左衛門沢左岸尾根～滝ノ沢～嶮岨森～大深山荘～樹海ライン～見返峠、みちのり・安野氏の近況、ゴアシェルター、柳又でのテレマーク、ブヨに注意、蕎麦は腹いっぱい食べましょう、1ルビーの花船、二児の父となる、最近の子ども、遠くへ行きたい、福沢論吉にふられて、時は流れて、街道の湯ほか

◎Next! No. 8 1996. 8 B5 42P 山岳溪流釣り集団むげん

新人紹介、メモリー・手応えあったぞ、川苔谷の夜はふけて、熊野川再訪、南会津・只見川支流叶津川、

- 下田・鎌倉沢、川苔谷逆川、川内・早出川、クロスポイント(友好の交差点)ほか
- ◎Next! No. 9 1996. 9 B5 36P 山岳溪流釣り集団むげん
上信越・魚野川、奥多摩・海沢、逆川、南ア・赤石沢合宿ほか
- ◎とまのかぜ No. 44 1996. 7 B5 36P 童人とまの風
奥秩父・鶏冠谷右俣、男鹿山塊・善知鳥沢、小蛇尾川釜沢、大蛇尾川西俣、男鹿山塊・オガクラ沢、南会津・湯ノ岐川渡沢ほか
- ◎とまのかぜ No. 45 1996. 8 B5 48P 童人とまの風
日留賀岳集中・大蛇尾川西俣、奥多摩・逆川、道南・大平山～長万部岳、西日高・雁皮山～糖平山、積丹・珊内岳、五頭連峰集中・折居川南俣沢ム沢、大荒川権次郎沢、大荒川西小倉沢、大荒川東小倉沢、大荒川スグノ沢、二の倉沢、中の沢川セキツギ沢右俣、中の沢川ササラ沢ム沢、中の沢ササラ沢団子屋沢、中の沢三階滝沢淀ヶ沢ほか
- ◎とまのかぜ No. 46 1996. 9 B5 26P 童人とまの風
下田・大谷川鎌倉沢、南会津・窓明山、会津駒ヶ岳、中ア・奥念丈岳ほか
- ◎山紫水明 No. 6 1996. 8 B5 20P 山旅の会
丹波川本流、森吉連瀬沢、エッセイ1秋田で釣り、エッセイ2釣り三昧の独り言ほか
- ◎山紫水明 No. 7 1996. 9 B5 30P 山旅の会
リーダーについて、和賀山塊・堀内川マンダノ沢、皆瀬川虎毛沢ほか
- ◎溪遊 NO. 89 1996. 10 B5 18P 溯行同人 溪遊会
(今回より会報交換することになりました。宜しくお願いします)
川内・中杉川、台高・本沢川黒倉又谷、北ア・金木戸川双六谷、台高・本沢川本流ほか

会報・記録集・報告書

- ◎むげん No. 8 1996. 8 B5 220P 山岳溪流釣り集団むげん
94. 遊びの記録・幕岩は甘くなかった、坪川、熊野川の陽は沈まず、志久見川、田子倉湖周辺の山菜採り、世界遺産の溪を行く、赤柴はいいよな、叶津の沢など、特集1・アンケート・釣り編、遡行編、岩トレ編、溪での生活編、家庭編、番外編など、特集2・94夏の記録・柳又谷から北又谷へ、焚火・回顧と抱負・転機、大切な思い入れ、邂逅と徒歩94、溪流解禁症候群、ささやかな下心、雨の夜でも焚火があればほか
- ◎あをい No. 45 1996. 9 B5 56P 水戸葵山岳会
第一部・合宿総括・平成5年度冬合宿・明神岳、平成6年度春合宿・穂高岳、冬合宿・唐沢岳、唐沢岳北尾根、平成7年度・春合宿・会津駒ヶ岳、冬合宿・槍ヶ岳集中、第二部・個人山行・黒部東沢、鳥海山、飯豊山、北岳バットレス、日光男体山、屋久島、縫道石山～黒伏山、那須岳、荒沢尾根、ヒマラヤトレッキング、第三部・エッセイ集ほか

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

今春、ヒマラヤにトレッキングに行ってきた。ツアーだったが、(単独にて参加。)殆どがフリー状態なので一人旅の気軽さと、仲間としての連帯感もあり、充実した山旅だった。そんな山旅とは違って、同時期に今年遭難死してしまった難波さん等が、エベレストを登っていたのだった。その時、私は多分登っていただろうエベレストを眺めていた。タンポチェからの眺めは最高で、私はその景観に感動しまくっていた訳だが、8000mの高所では極限の世界が広がっていたのだ。その高所では50m上がるのも至難の業であったと思う。もうそこは神の領域。我々下界の人間には理解出来ない世界なのだろう。

エベレスト、そこは資金的にも(難波さんは650万もの費用がかかった)技術的にも、体力的にも、精神的にももろもろの越えられない高いハードルがある。

しかし、ある古本屋で見つけた本。七大陸の最高峰登頂(セブン・サミッツ)には、50歳を過ぎたウォルト・ディズニー・プロダクション社長フランク・ウェルズ氏と石油会社、スキー場経営等の実業家のディック・バスの二人により1983年、1月~1985年、4月の短期間に登頂されたと書かれてあった。(かなりのスタッフがいたのだが。)でも確かに体力的、精神的には凄い事だと思うが、資金力が余りにも違い過ぎる。我々庶民とは、根本的に財力が違いすぎる。

やはり我々、一般クライマーには、エベレスト登頂、そしてセブン・サミッツとは儚い夢なのであろうか…。

(編集長)



季報[R&V]第22号 発行1996年 夏

発行者: 鯉河仁志

発行所: ACC-J 茨城

〒306-005 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男 方

編集者: 生井一男

印刷所: やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団